

552-3161

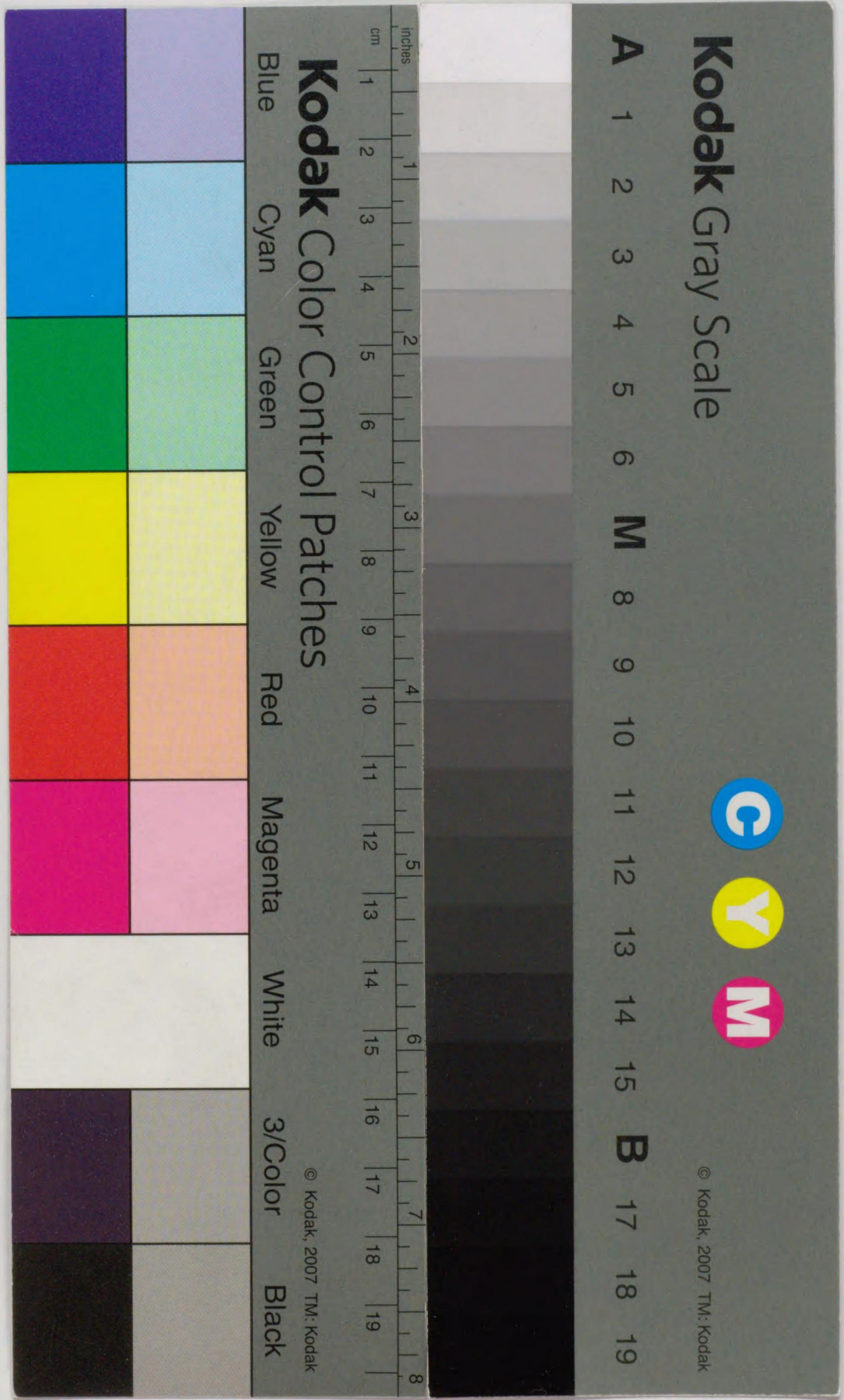
552

3161

1200501509182

釋尊の教

中山文化研究所編



釋尊の教

東京

中山文化研究所

釋尊の教



文學博士
醫學博士

富士川

游 講註

釋

尊

の

教

東京

中山文化研究所



~~626-165~~
552-316

はしがき

この小篇は、余が中山文化研究所に於ける婦人精神文化研究会の席上にて、十數回に涉りて、連続的に講話したるものを筆録したものである。釋尊の教は、言ふまでもなく、佛教と名づけられて、古くから行はれて居るものであるが、しかし、それは多くは専門の學問的のもので、まことに精緻を窮はめたものではあるが、宗教としてそれを味ふには、あまりに學究的で、その要旨を捉へることが困難であるやうに思はれる。余がこの講話は、余が平生釋尊の教につき考へて居るところのものを順序なく叙述したもので、固より纏まつた著述の類ではない。しかしながら、余の眞意は、なるべく多くの人々をして、その宗教の心を啓發して、日常生活の上に資するところがあるやうにと望むのである。この方面より見ればこの小篇も全然無用のものではないと自信し、拙劣をも顧みず敢てこれを世に公にするのである。

昭和八年十一月下旬

富士川 游

釋尊の教 目次

序言	一
三毒	二
貪瞋癡	二
貪毒	三
瞋毒	四
癡毒	四
貪欲の三相	五
瞋恚の三相	六
愚癡の三相	七
自是他非	八
世間の教	九
他に縮る	一〇
自我の實現	一一
制せられたる自己	一二

道德の苦	一三
眞實の苦	一四
老死の苦	一五
生の本	一五
愛と取と有	一六
愛と受	一七
受と觸	一七
觸と六處と名色	一八
識と行と無明	一八
十二因縁	一九
因と果	二〇
實際的説明	二一
内觀	二一
心の所作	二二

因縁の道理	二二三
我執	二二五
自心の問題	二二六
流轉輪廻	二二六
出離	二二八
醉生夢死	二二八
宗教の心	二二九
自己の責任	三三一
業報	三三二
業と業と	三三三
五蘊の集散	三三三
業の説明	三三四
自覺の極致	三三五
業の思想	三三六
業力・業因・業有	三三七
業縁・業果	三三八
地獄の有無	三三九

必墮地獄	四〇
六道輪廻	四一
業は盡きず	四二
身口意の三業	四三
表面の解釋	四四
實行不能	四四
運命	四五
蜘蛛の話	四六
おしも	四八
宗教か道徳か	五〇
人間と宗教	五一
自分のものとする	五二
理想と努力	五三
身體的苦行	五四
成道	五五
業は離れず	五五
一人四婦の譬	五六

人間の心	五九
心の愛護	五九
造業四種	六〇
種々の業	六二
前世の約束	六三
心内の問題	六三
乞食の子	六四
前業の所感	六六
心の現象	六八
末那識	六九
自己意識	六九
阿頼耶識	七〇
人の無我	七一
法の無我	七二
心の影	七三
四種の法	七三
心を本とす	七四

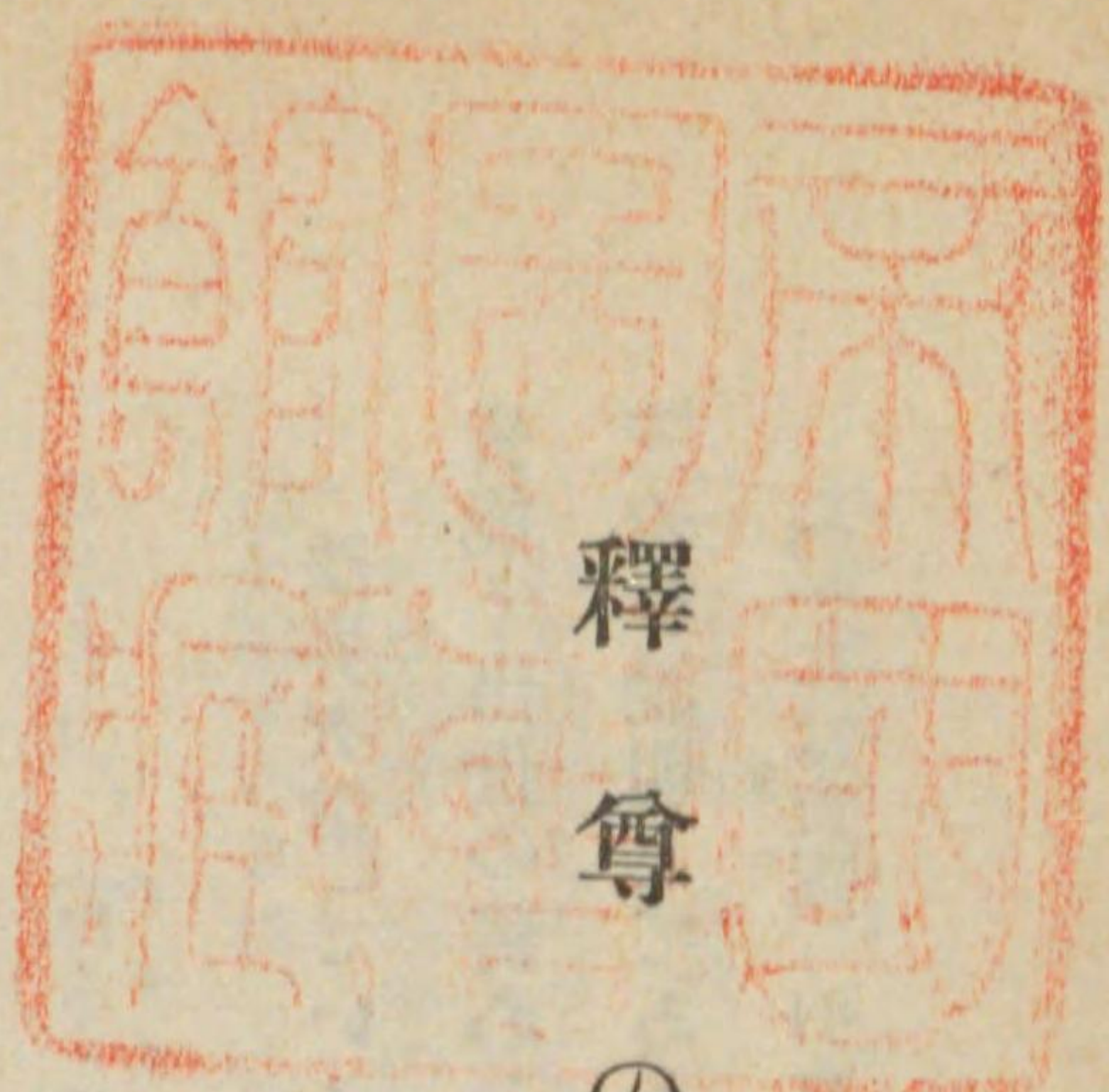
我他彼此	七五
眞理を知らず	七六
小智を棄つ	七七
聖智を求む	七八
分別の見	七八
感報の世界	七九
業報身	八〇
生死の海	八一
念念相續	八一
六道輪廻	八二
往生要集	八三
八大地獄	八四
餓鬼道	八七
畜生道	八八
修羅道	八八
人間道	八九
天上道	八九

六道の存否	九〇
勸善懲惡	九一
理想なき生活	九一
三惡道と三善道	九二
人間の相	九四
罪惡深重	九四
惡業煩惱	九五
根本煩惱	九七
十煩惱	一〇一
隨煩惱	一〇一
繫縛	一〇五
惡業	一〇六
愚惡	一〇六
感覺に弄ばる	一〇七
煩惱そのまま	一〇八
徳果罪報	一〇九
三天使	一一〇

五の惡	一一三
一の惡	一一四
二の惡	一一五
三の惡	一一六
四の惡	一一七
五の惡	一一八
惡の厭離	一二〇
我想と苦	一二一
無常苦	一二二
淋しさ	一二二
生死解脫	一二三
彌陀の國	一二四
苦惱の經驗	一二五
涅槃寂靜	一二六
愛欲の純化	一二六
理想の境地	一二七
豫想の所	一二八

極樂往生	一二九
道德超越	一三〇
我の問題	一三一
自我の輪廻	一三二
四法本	一三二
三法印	一三三
五蘊	一三五
身と心	一三六
別の我なし	一三八
情・塵・識	一三八
斷常を離る	一三九
作用の相續	一四〇
意識内容	一四一
心性清淨	一四二
三界唯心	一四三
心佛衆生	一四四
涅槃寂靜	一四六
涅槃寂靜	一四七

法性の眞理	一四八
無爲の都	一四九
法性の都	一五〇
八正道	一五一
如實修道	一五二
愛欲の斷滅	一五三
愛欲の淨化	一五四
愛欲の否定	一五五
彼岸の世界	一五八
釋尊の教	一五九



釋尊の教

序言

富士川 游講話

ここに、私は釋尊の教と題して、私が考へて居るところをお話致さうと思ひます。世間で今、佛教と申して居るところのものは、釋尊が創められた宗教であります。そのことにつきて論述したる書物は随分澤山ありまして、それを研究することは特別の學問であります。しかしながら、今、私はそれを學問として研究しやうとするのではなく、釋尊が體驗せられたる宗教が果して如何なるものであつたかといふことにつきてお話致すのであります。殊にそれを我々の心の上に實現せしめるといふことにつきて、極めて平易に、説明しやうと思ふのであります。

三 毒

佛教でしばしば使はれる言葉に三毒の煩惱といふことがあります。その毒といふことは毒害を
するといふ意味であります。何を毒害するかといへば、それは菩提の道を毒害するので、それが三つ
ほどあるといふわけで三毒といふのであります。さうして毒をすると申すのは、畢竟するに我々の
心を掻き亂すものを指していふのであります。元來、我々はその心を鎮めて、さうして、正しい道
へと進んで行くために努力せねばならぬのでありますけれども、それを妨げるものが三つほどある。
それは貪欲・瞋恚・愚癡の三つであるといはれるのであります。

貪 瞋 癡

「法界次第」といふ書物に、説明してあるところに據りますと、『毒とは毒害なり、謂ふ、貪瞋癡は
皆能く出世の善心を破壊するが故に毒と名づくるなり。』とありまして、それからこの貪・瞋・癡の
三毒が説明してあります。それによると。

『一には貪毒 引取の心、これを名づけて貪となす。若し迷心を以て一切順情の境に對し引取厭くこと無し、こ

れを貪毒と名づく。

二には瞋毒 忿怒の心、これを名づけて瞋となす。若し迷心を以て一切違情の境に對し便ち忿怒を起すときは、
これを瞋毒と名づく。

三には癡毒 迷惑の心、これを名づけて癡となす。若し一切の事理の法に於て明了する所なく顛倒妄取、諸の邪
行を起すときは、これを癡毒と名づく。』

かやうに、貪ること、怒ること、眞理を知ることの智慧のないことこの三つのものは、『皆能
く出世の善心を破壊するが故に毒と名づくるなり』と言はれて居ります。出世の善心と申すのは、
この世間を出づるための善心を破壊するといふので、言葉をかへていへば、佛になるために必要な
善心を破壊すると言はれるのであります。

貪 毒

貪毒とは『引取の心これを名づけて貪となす。』とあるやうに、何でも自分に勝手なものを取込む
心持であります。我々の心は迷つて居るのでありますから、一切順情の境に對して引取の心を起し
てやまぬのであります。一切順情の境とは、周圍にあるものが自分の氣に入つた場合をいふのであ

りまして、さういふ場合であればそれを自分の方に取込まねばやまぬといふ心持であります。若し自分の氣に入つた場合であれば、いやが上にもいよくこれを自分の方に取込まふとする心、これを貪毒といふのであります。

瞋毒

瞋とは忿怒の心であります。忿といふのは自分の心の中で腹を立てることをいひ、怒といふのは外の形で腹を立てたことをあらはすことをいふのであります。自分の心内で怒つて居つても黙つて居ることもあり、ガミ／＼さわぐこともあり、さういふことを怒りといふのであります。我々は迷つて居るのでありますから一切違情の境に對して常に腹を立てるのであります。違情といふのは自分の氣に入らぬことであります。貪といふことは自分の氣に入る場合にあらはれるもので、周囲のものが自分の氣に入ればすなはち貪るのであります。若しそれが自分の氣に入らぬことであれば忿怒を起すのであります。これを瞋毒と名づくるのであります。

癡毒

癡といふのは迷惑の心と説明してあります。迷惑といふのは正しい道理を知らないために、心が常に迷ふことをいふのであります。一切の事理の法に於て明了するところがないのを指していふのであります。この事理の法とは、事と理といふ意味で、事といふのは實際そこに形があるものを指すのであります。理といふのは形が見えない眞理を指すのであります。その一切の事理を明かに理解することがないのであります。それがために、道理がわからぬ、道理がわからぬから顛倒の考へを起して妄にこれを取るのであります。さうしてその結果として諸の邪行を起すのであります。

貪欲の三相

更に細かに考へると、貪るといふことにも三つの相があるといふのであります。その一とつは、外方の貪欲でありまして、男女に於てその外に出て居るところの容貌を取つて貪欲の心を起すのであります。つまるところ、現れた相を見て、さうしてそれを貪るのであります。それから二番目は、内と外との貪欲の相であります。欲忽ち生じ、或は他の相を縁とし、或は自分の身體を縁とし、貪る心が起きて來るのであります。第三番目は、徧一切處の貪欲の相といはれるもので、徧一切處といふのは、萬徧なく全體といふ意味であります。一切五塵境界と申してすべてのものに貪愛の心を起すの

であります。見るもの、聞くもの、嗅ぐもの、觸るもの、一切のものが欲しくなるのであります。それを徧一切處貪欲の相といふのであります。要するに我々人間は自分の好きなものを貪ぼるのでありますから、一寸外から見て綺麗なものが欲しい、それから人が何か物を持つて居る、それも欲しい、自分に足りないところがある、それが欲しい、何でも彼でも人一切が欲しいのであります。

瞋恚の三相

腹を立てることも亦、三つの相があります。第一に非理瞋相と申すのは物事が理窟に合ふか、理窟に合はないかといふことの差別なく、腹を立てるのであります。理非を問はず何でも蚊でも腹を立てるのであります。人が自分に對して何か言ふ、それが理に合ふたことでも腹が立つのであります。それから第二に順理の瞋といふのは、他の人が来てさうして自分を惱ます、それを縁とし腹を立てるのであります。又人が何か彼とかいふ、或は人がいろんなことをする、それで以て腹を立てるのであります。つまるところ腹の立つべき理由がありて腹を立てるのであります。或は自分が戒律を保つて道徳堅固にして居るときに、さうしないものを見て腹を立てて、どうもあの奴はいかぬと腹を立てるのであります。他の道徳の堅固でないものをひどく悪くいふやうなことが順理の瞋

と言はれるのであります。第三には諍論の瞋といふのであります。これは自分が考へたところを善いときめて、他の人の考へることは悉く悪いとして腹を立てるのであります。自是他非の心とはすなはちこれを申すのであります。自分のすることであれば、何でも蚊でも善いが、人のしたことは一も二もなく悪いとして諍論の結果腹が立つのであります。

愚癡の三相

愚癡にも三種の相があります。第一は計斷常の癡であります。自分の考へが邪であるのに、その邪しまの考を以て一切のものをいろ／＼分けて考へるのであります。さうして過去といふものもあう滅してないけれども、現在我といふものはあるといつてみたり、或は過去は滅しないで現在もあると言つてみたり、つまり斷つと見たり、斷たないと見たりするのであります。さういふ智辯を以てお互ひに喧嘩をするのであります。兎角お互ひに下らない理窟を言つて居るのであります。それ故にすることが一切悪いことになつてしまふのであります。それから第二に計有無の癡といふのは、すべてが有るか無いかといふことを計ふのであります。有といつたところが無といつたところが皆人間の考でありますから、有るといつても無いといつてもどちらが眞實かわかりませぬ。夢の中で

有るといつても、無いといつても同じく皆夢であります。それを有ると言つたり、無いといつたりして喧嘩をするのであります。自分の見に隨うて執を生ずといふのがすなはちこれでありませう。第三には計世相の癡といふのは足らぬ智慧を以て世の相を計ふのであります。たとへば五蘊といふものが集つて身心が出来、五蘊といふのは色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊、この五つの蘊で、それが集まれば四大といふものが出来る、四大といふのは、地水火風である。我々の相もそれで出来る、諸の世界といふものもそれで出来る、かういふ風に考へて、さうしてその考を本として智辯を弄するからそこで眞實の道を離れる、と斯ういふのであります。これが計世相の癡といはれるのであります。

自是他非

かやうに貪・瞋・癡の三毒の相が細かに説かれて居るのでありますが、それは要するに、今現在にはたらいで居るところの我々の心の相を指すのであります。皆さまも深くお考へになつたら、必ずその通りであることが知られませう。何でも自分の好きなものが欲しい。又人の持つて居るものでも自分の氣に入れば欲しい。何でも人がくれれば皆貰ふであります。徧一切處の貪欲の相は誰でも持つて居るのであります。又自分の心持が一寸動く、直に腹が立つてありませう。人が悪口を言へば必ず腹を立てるのは、まあ當然とするにしましても、我々は親切に人が自分の悪いことを忠告して呉れましても腹が立つのであります。自分のしたことが自分の氣に入らなくても腹が立つ、まして自分のしたことがよいと考へるときにはそれに對して彼此といふ人の言葉などには腹が立つのであります。かやうにすべての人は皆自是他非の心を持つて居るのであります。それ故に我々の心は常に争鬭を免るることが出来ませぬ。

世間の教

かやうに、我々の心はまことに醜惡のものでありますから、それを直して、正しき道に進ましめるためには道德が説かれて居るのであります。それ故に、道德の教は第一に我々の心の貪・瞋・癡の三つのものを制しなければならぬと説くのであります。たとへば自分で不養生なことをして、勝手に喰つたり、飲んだり、騒いだりして、さうして身體を壊して置いて、醫者を頼んで治療を施して貰つてもなほらない、そこで人間は駄目だと言つて神さまを頼み、佛さまを頼んだところが、それで病氣がなほる筈は決してない、又さういふ場合に自分の責任といふものを考へないで、その責任

を全部神や佛に譲らうとすることは道徳の上から言つても間違つたことであります。自分でしたことは自分でその責任を負はなければならぬ。電車か何かのやうなもので、それがやつて来てぶつつかつて怪我をしたときでも、全く電車に罪があるとは言はれませぬ。電車にぶつつかるやうな位置に居つたといふことは我々の責任であります。それと同じやうに病氣に罹るといふことも自分の責任を免るることは出来ませぬから、自分に責任を負うて、それを忍従するより外はないのであります。世間の教としての道徳の上から言へば、結局そこまで到達するのであります。

他に縮る

このことにつきて、釋尊の言はれた言葉が「法句經」の中に載せてありますが、それに據りますと、『怖れおのゝいた人々は山々や森や、さては又園に生ゆる樹や、土墳に、かうした数々のものに保護を求め。然しかうしたものは決して安らかな保護ではない。又それは最上の保護でもない。よし、かうしたものに保護を求めたところで、すべての苦しみからのがれることは出来ない』友松圓諦氏譯「佛陀の言葉」に據る）といふことがあります。それを支那譯の「法句經」には『或多自歸山川樹神、廟立圖像、祭祀求福、自歸、如是非吉非上、彼不能來、我苦』と書い

てあります。それによりますと、山や川や樹を神として祭つたこと、それによりて苦しみから免がれることは出来ない。自分の心が苦しいからと言つて、神を頼むといふことは眞實の道ではないと、かう言はれるのであります。昔から俗間に鰯の頭も信心からと申して、信心すれば鰯の頭にも功德があるといはれて居りますが、しかしながらさういふ功德が我々を救ふことは出来ないことであります。釋尊はその當時、印度にて盛に行はれて居つたところの自然物やその他のものを崇拜する宗教は何の役にも立たぬと排斥して居られるのであります。それ故に、釋尊は此の如く徒らに他に縋りて自己の望を達するやうにと努むることを止めて、自分のことは自分で始末するやうにと教へられたのであります。

自我の實現

そこで釋尊が言はれたる言葉の中には眞實なる自己の完全なる實現を主要とすることを説かれたることが多いのであります。たとへば『惡は自から罪を受け、善は自から幸ひを受く、亦、おのゝ須らく熟すべし、彼れ相代らず』と言つて居られます。又『自から行ひ作つた惡業は自からに生れ出で、自らに成熟したものであつて、やがてその愚人を損ひやぶる、金剛石が寶石をきづつけるや

うに』といはれ、又『不道德の行爲がはげしい人は、蔓草が自から寄生して居る樹木を覆ふてしまつて遂に自からも枯れ亡ぶやうに、まるでその人の敵が望んで居るやうな、そんな行爲を自分に對して行ふものである』『不善であつて自分に對して有害であることの方が行ふに容易である。これに反して利益であると共に又善行であるやうなことは、かへつて自からには極めてむづかしいものである』と言つて居られるのであります。かやうに自から造つた悪業は自からに生れ出で、自からに成熟したものであつて、やがてその愚人が損ひやぶられるのでありますから、悪いことをしたその結果は、その悪いことをしたものがやぶられるのであります。そこで釋尊は『まことに自分こそ自分の救護者である、一體、誰がこの自己の外に救護者となり得るものがあらうか。』と言はれ、『汝自からの燈をもつて、汝自からの道を照せ』とまで、痛言して居られるのであります。

制せられたる自己

自分の苦しみを除くことは、自分でなければ出来るわけではないのであります。苦しみといふことは、自分の心持であるのに、それを他の人に頼んでもその苦しみが止むわけはありません。たとへば痛いといふことは自分の心持でありませう。自分が痛いと感じるのであるのに、それを他の人に頼

んでも痛いことが止むわけではない。たゞ痛い／＼と言つて居るより外に仕方がない、つまり痛いといふより他に仕方がないのであります。自分の痛い心が止まなければ痛いことが止むものではないませぬ。しかるに、それを止めようとして、神に頼み、或は佛に頼むだとても結局無駄のことです。それ故に、自分の苦しみがどうしても自分の心によりてなほす外はありません。さうしてそれは自己を制することによりて出来るものであります。釋尊が『汝自からの燈火をもつて汝自からの道を照らせ』と言はれたのは『よく制せられたる自己』をたよとして正しき道を進むべきことを示されたのであります。

道德の苦

我々にして若し、内觀を深くして、自分の心の醜き相を見るとき、必ず悲痛の感が起るであります。しかもそれが自分の責任であるといふことをしみ／＼と考へるときに、その場合、我々はごうすることも出来ませぬ。まことに道德の苦しみが強く感ぜられるのであります。かやうに自分の心の淺ましい相がわかるといふと、ますます苦しくなるのは全く道德の心がはたらくのであります。道德の心に缺けた人は悪いことをしながら、それを苦しく感じないから平氣で飛んだり躍ねたり

して人に迷惑をかけて何とも思はないのであります。

眞實の苦

全體、我々が悪いといふことを知るの善いことに對してのことでありますから、悪いといふことを感ずれば感ずるだけ、善い方へと向つて居る道理であります。それ故に自分の相を見て、その悪いといふことに苦しみを深くするといふことは善いことに對して申して居るのであります。それこそ眞實の苦しみであります。しかしながら、通常我々が苦しいといふのはこれに反して自分の都合の悪いときだけのことでありませう。又、ごうかして自分の悪を辯護しようといふところに辯護の仕方に苦しむのでありませう。これは現實の自分の心の相に苦しんで居るのではなくして、自分の悪いことを知つても如何にしてかそれを辯護して、さうしてそれを悪くないものにしよとすることを我々の計らいの心であります。我々は此の如き得手勝手の苦しみの心でなく、眞實の苦しみに就て、深く考へねばなりません。それには先づ道德の心を明かにせねばならぬ。釋尊はこのことにつきて深く考へられたのであります。

老死の苦

そこで眞實の苦しむとして第一に擧ぐべきものは老死の苦であります。釋尊が成道せられてから第三番目の夜——釋尊が修行して悟りを開かれたことを成道と言ひますが、成道せられてから第三番目の夜に、人間の老死につきて考へられた。我々人間は段々と年を取り、さうして結局死ぬるので、それが苦しみの種であります。その老死がどういふ譯で出来るものであるかといふことの因縁を考へられた。そこで釋尊が、どういふ考をせられたかといふと、「因果經」には、『生を以て本とす』とありまして、生れるといふことが老死の本である。若し生れるといふことがなかつたならば老死といふことはない、生れるといふことが因であつて、それから老死といふものがあらはれるといふことを第一に考へられたのであります。

生の本

然らば、その生といふものはどういふ譯で起きて來たのであるかといふに、これは無論天から降つた譯でもなければ、地から湧いて出た譯でもない。又それは全く偶然に起きたといふ譯でもな

い。然らば、どうしてそれが出来たか、釋尊はその因縁を考へて、それは「有」といふもののためである。と知られたのであります。

愛と取と有

然らば、「生れる」といふことは、どういふことであるかといふのに、それは現在、我々に愛といふことと、取といふことと、有といふことと、この三つの惑があるために、「生れる」といふことが起るとせられたのであります。その有といふのは、それは我々が貪欲のために、善いとか、悪いとかといふやうな業をつくつて、さうして未來の身を有するから、それで有と名付けるのであります。畢竟、我々が善いとか悪いとかの色々な業を造るために、未來は必ず、生・老・死といふ果報を得るのであります。それ故にこれを「有」といふのであります。さうして、その「有」といふものは、それは「取」といふはたらきによりてあらはれるのであります。貪欲のために方々に馳ずり廻つて、さうして少しも身體が疲れるといふことを厭はないやうな貪欲の心をはたらかすので、それを「取」といふのであります。「取」ある故に「有」があるので、「有」の本は「取」であります。さうしてこの「取」といふものは「愛」から起るので、「愛」といふものは、十四、五歳の頃か

ら後になりて現はれる心で、自分の方へ取込む、自分に氣に入つたものを取込む、さうして氣に入らないものを捨てるのであります。それを「愛」といふのであります。

愛と受

かやうに「愛」といふものが起きて来るから、そこに「受」といふものがあらはれるので、「受」の因は「愛」であります。「受」といふものは五、六歳以後になりまして自分に苦しいといふことと、苦しくないといふことを感じ、段々とももの道理がわかつて来ることをいふのであります。さういふ風になるから、苦しみと樂しみが自分にわかり、自分に都合のよいといふことがわかるから、それで勝手のよいことだけを取つて、勝手のわるいことを捨てるやうな「愛」とか「受」とかいふやうなはたらきが起るのであります。

受と觸

その「受」のはたらきは何處から起るかといへば、それは「觸」といふものから起るのであります。これは生れてから後二つか三つ位までは、苦しみとか或は悪いものを捨てるといふやうなこ

とがわからないで、火に觸れば熱い、水に觸れば冷いといふやうなことだけがわかるのでありますが、それを「觸」といふのであります。それが本となりて、段々と自分に都合のよいことと悪るいことがわかるやうになりてから、そこで「受」といふものが起きて来るのであります。

觸と六處と名色

かやうに「受」は「觸」に本づくものでありますが、その「觸」といふものの起りは「六處」であります。「六處」とは六根のはたらきが起きてから、それから生れて来るまでの間を申すのであります。六根といふのは、耳と目と口と鼻と身體と、さうして舌とであります。つまるところ感覚が我々に起きて来るころの本を六根といふのであります。かやうに觸の起りは「六處」であります。さうしてその「六處」の起りは「名色」であります。その「名色」といふのは、母の胎内でまだ耳や目や鼻などの六根の出来ない前を指していふのであります。

識と行と無明

「名色」のその根本は「識」といふものであります。今、我々が此世に生れるといふと、それは現在生を結ぶのでありまして、即ち意識があらはれるのであります。これを「識」といふのであります。その「識」の起りは「行」で、「行」といふのは我々が、過ぎ去つた間に業をつくつたことをいふのであります。過去に色々の業をつくつた結果として、我々の心が生れて来たのであります。ここに業といふことは、我々が考へたり、言つたり、行つたりしたことをいふので、つまり我々の行爲であります。この過去の業からして今の我々の心が生れ、その心からして名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死とが順々に起つて来るのであります。さうしてその「行」の本づくところは全く「無明」にあるとせられたのであります。

十二因縁

釋尊が成道の後第三番目の夜に考へられたことは、かういふ風に、人間が生れて、さうして年を取つて死ぬるといふ、その有様を分析して因縁の次第を擧げられたのであります。それが十二段になつて居りますから、これを十二因縁と申すのであります。これは「俱舍論」と申すお經に書いてあるところの意味を軟らげて説明したのであります。我々が年を取り、さうして死ぬるといふことは、結局、生れるといふことがあるから起るものであります。が、「生」は「有」から起る、「有」

は「取」から起る、「取」は「愛」から起る、「愛」は「受」から起る、「受」は「觸」から起る、「觸」は「六處」から起る、「六處」は「名色」から起る、「名色」は「識」から起る、「識」は「行」から起る、「行」は「無明」から起るのであります。それを逆に考へると「無明」があるから「行」、「行」があるから「識」、「識」があるから「名色」、「名色」から「六處」、「六處」から「觸」、「觸」から「受」、「受」から「愛」、「愛」から「取」、「取」から「有」、「有」から「生」、「生」から「老死」と、段々に因縁をなしてあらはれるのであります。

因と果

この十二因縁をわけて説明しますると、「無明」と、さうして「行」といふものは、これは過去の原因であります。我々には過去に「無明」と「行」といふものがあつたのでありまして、この「無明」と「行」といふのは畢竟煩惱であります。その煩惱が「業」といふものをつくつたのでありますから、その煩惱によりて作られた「業」によりて、それが過去の原因となりまして、現在に五つの果を結んだのであります。即ち「識」と、「名色」と、「六處」と、「觸」と、「受」とこの五つものが過去の原因によりて現在にあらはれた結果であります。その現在が又「愛」と「取」と「有」といふ三つの原因によりまして未來に二つの果を生ずるので、それがすなはち「生」と「老死」とであると説かれるのであります。

實際的説明

勿論、この十二因縁といふものは抽象的に、誰にもわかり易いやうに筋道を立てて説明せられたのでありまして、實際にさういふやうに段階がわかれて居るといふのではありませぬ。畢竟するに、我々の苦しみといふものを分析して、その苦しみが由りて來るところの原因を尋ねて見れば、その根本は「無明」にある。「無明」といふのは智慧のないこと、世の中の眞理を明かに知ることが出來ぬといふことでありますが、それはすなはち我々の過去の煩惱を總計したものでありますから、過去に我々が造つた「業」から、段々と苦しみがあらはれて來たといふことをば深く考へられた結果として、釋尊は此の如く十二因縁を説かれたのでありまして、それは決して哲學的のものではなく、全く實際的の説明に外ならぬものであります。

内 觀

釋尊は深く内觀せられたのでありまして、その結果、我々凡夫は何時でも邪なる心を起して愚痴に眼を潰して、さうして「我」といふ差別の相に執著して、さうして貪欲の心を盛にはたらかすに
よりて、結局、生死の身體といふものを生むのであると考へられたのであります。我々は「識」と
いふものを種として、さうして無明のはたらきによりて平等の眞理を離れ、愛の水でそれを潤し、
得手勝手の心をそれに注いで、それによりて邪なる考へを段々と増長せしむるために、そこに「名
色」があらはれ、「名色」によりて目や耳や鼻や舌や身體、心といふやうな色々な根が出来るのであ
ります。さうしてその根からして「觸」が出来、「觸」から「受」が出来、「受」から「愛」が出来、
「愛」から「取」が出来、それで「有」といふものが出来、そこから五蘊の身體が出来るのであり
ます。その五蘊の衰へたのが「老」といふのであり、五蘊といふのが滅したのが「死」であります。
我々はこの老死のために常に憂へ、常に悲しみ、常に苦しみ、常に悩むのであります。しかしなが
ら此の如き、十二因縁といふものは別にこれを集めるものがあるのではありませぬ。自分の心の無
明と業とによりて自分でこれをつくり上げるのであります。

心の所作

かやうに、我々が種々の苦しみを起すのは全く我々の無明と業とに本づくものでありまして、過
ぎ去つた時代にいろ／＼の煩惱を起して、それによりていろ／＼のことをしたために、それが原因
となつて「識」が出来、「名色」が出来、「六處」が出来、「觸」が出来、「受」、「愛」、「取」、「有」と
いふものが漸次に出来て、結局、我々の心といふものが出来上つたのであります。別にこの心を造
つたものがある譯ではありませぬ。又偶然に出来た譯でもありませぬ。全くさういふやうに出来る
だけの因縁といふものがあつて出来たのであります。さうしてその因縁は全く自分の心のはたらき
に存するものであると釋尊は説かれたのであります。さうして、釋尊はその心の相を眞直に見て、
その相の儘に説明せられたのであります。釋尊が説かれた十二因縁は六ヶ敷しい理窟を説かれたの
でなく實際に我々の心の相を分析して話されたのでありましてその意味といふものは實に簡單にし
て明瞭なるものであります。今多くの人々が苦しむ、それは全く自分の心が苦しむのである。苦し
みといふものが別に心の外にありて、さうしてそれが我々の心に入るのではないと言はれるのであ
ります。

因縁の道理

釋尊のお弟子がこの十二因縁の説明を聞きまして、さうしてその心を開いたものも多かつたでありましたらうが、阿難といふ方は釋尊の從弟で、その弟子になつたのでありますが、或る時釋尊の前に出て、『貴方の教へて下さつた縁起の道理を聞きまして、まことに深い道理のものであると感じましたが、その道理が今日私に分りました』と、釋尊の前に出て言つたところが、釋尊が言はれるのに『さういふことを言つてはならない、この因縁の道理はまことに知り難いものである。多くの人々が苦しみと惱みの世界に在るのも全くこの縁起がわからぬためである』と言つて阿難がわかつたやうにいふのは決してわかつたのでないことを戒められました。それから『自分が老死の縁は何によりて出来るものであるかといふことを説いたのは、「生」といふことは「有」に依り、「有」は「取」に依り、「取」は「愛」により、「愛」は「受」に依り、「受」は「觸」に依り、「觸」は「六處」に依り、「六處」は「名色」に依り、「名色」は「識」に依り、「識」は「行」に依り、「行」は「無明」によりて生ずることを説いたのであるから、その中の「愛」といふものは「受」の縁であるといふことをば一つ説明して聞かさう』と言つて更に十二因縁のことにつきて説き示されました。その要旨は次の通りでありました。

我執

「愛」といふことは「受」によりて起るのであるが「受」といふのは自分の心に適つたものを取り、自分の心に適はないものを取らないところの心はたつきである。その「受」の心があるからして、「愛」といふ心が起るのである。自分に氣に入つたものに執著をするといふ心が起る。であるから「受」がなければ「愛」は起らぬ、「受」を縁とし、「受」を本として「愛」が起り、「愛」によりて求むるといふ心が起り、求むるといふ心から得るといふことがある。得るといふことがあるから、そこで善いとか悪いとかといふことを撰ぶ心が起るのである。自分に欲しくなるとそれを得やうとする。さうしてそれを自分の手にすることが出来るときは、善いものを手にして悪いものを捨てやうといふ心が起る、すなはち善悪を撰ぶ心が起る。善悪を撰ぶによりて欲が起り、善いとか悪いとか自分に分るからそれで善いものを自分に取つて行かうといふ欲が起る。欲が起るからしてそこに執著が起る。執著が起るから嫉妬といふものが起る。嫉妬が起るから、それで更に貪るといふ心が起つて来る、貪るといふ心が起るから、自分のものを人にやるまいとそれを防ぐといふ心が起る。そこで刀をもつて争ひ、杖を以て争ひ、互ひに譏り合つてさうして互ひに嘘を言ふ。人間の

よろづのことは皆、これから起るのである。釋尊はかやうに阿難に對して説明せられた後に、斯ういふことは結局「我」といふものがその根本であるといふことを示されたのであります。

自心の問題

そこで前に段々申上げた十二因縁といふものは、全く自分の心のはたらきを示したもので、苦しみは全く自分の心からあらはれるといふことの説明になるのであります。それを引きくるめて言へば「我」があらはれる因縁であります。さうして、この「我」から離れるといふことが苦しみを免かるる道であります。佛教の外の宗教でありますと、我々の心の外に神とか何とかいふものがあります。さうして自分がその神に救はれるやうな、極めて簡単な、又極めて輕便なことが説かれて居りますけれども、しかしながら、釋尊の教は決してさういふやうなものでなく、前に申したやうなことから、何時でも自分の心が問題とせられるのであります。従つて自分の心以外のことを考へるのではありません。

流轉輪廻

かやうに考へて來ますと、我々が現在今日あるは全く自分の過去の業のためであります。親鸞聖人の和讃の中に『生死の苦海ほとりなし』とか、或は『流轉輪廻のきはもなし』とかいふやうな言葉が用ひられたのは、全く具體的にこの十二因縁の結果を示されたもので我々は自分の業の相續をして居るものであります。生死の苦海といふものには際涯がないものである。くる／＼廻つて居つて生れるかと思へば死ぬる、死ぬるかと思へばまた生れる、すなはち生死の苦海を流轉するのであります。さうしてそれは前の世に犬であつたものが、此世に人間になつたといふやうな意味の輪廻轉生を説くのではありませぬ。流轉輪廻と申して生死の苦海を流轉してそれを離るることが出來ぬといふのであります。お互に朝から晩まで働いて居るのであります。何を働いて居るかといへば、死んで又生れるやうに、つまるところ苦しみから離れないやうに仕事をして居るのであります。たとへば人の物が欲しかつたり、自分の物を人にやりたくなかつたりするやうな苦しみ種ののみをつくるのであります。少し善いことをしたと思ふとそれが又悪くなる、人を助けてやつたと思ふと、もう助けたといふ自慢が出る。さういふ風にして「業」のはたらきがあります。強くなるために生死の苦しみがぐる／＼流轉して止むことがないのであります。まことに生死の苦海ほとりなく、流轉輪廻きはみなしと言はねばならぬのであります。

そこで釋尊の教に於て、その最後の目的はごういふことであるかと言へば、一たび死んでから最早この世に生れないやうに期するのであります。他の言葉にては涅槃のさとりを開くことを期するのでありますが、釋尊の言はれるところの涅槃といふことは、我々が死んでから最早人間界には生れて來ぬことを言ふのであります。人間界に生れて來ぬといふことはすなはち生死の苦界を出離するのであります。佛に成ることを目的とすると言はれますが、佛になれば最早人間の世界に生れて來ないのであります。しかるに我々は「業」のはたらきによりてこの生死の苦界を出離するの縁がないのであります。いつまでも前世の業を相續するのみでなく、又新しく業をつくり上げてそれがために生死の苦界を出離することは出來ぬのであります。

醉生夢死

昔から人間の一生は旅にたとへられて居りますが、なるほど人間の一生といふものは旅にたとへてもよろしいであります。心學でも、この世へ來て假の宿に居ると思へば我儘は言はれない、

自分の家だと思へば我儘も言ふけれども、人の家に厄介になつて居るかと思へば我儘は言へないといふやうなことが説いてあります。それは兎に角、人間の一生を旅にたとへるといふことは無理でありますまいから、さうすれば一つ旅にたとへて考へて見たいのは、今我々は汽車に乗つて旅行をして居るのでありますが、列車が進行して居るところへ乗つたのでありますから、それが何處から出發して何處へ向けて行くのであるかサツパリわかりませぬ。さうして列車の窓から首を出して、天氣がよいか悪いか、金が儲かるか儲からないとか、あれが欲しいとか欲しくないとかいふやうな話をしてお互に日を暮して居る。それが我々人間の現在の有様であります。さうして自分の乗つた汽車は何處から出て來た汽車か、自分の乗つて行く汽車は何處へ行くのかも知らず、又それを知らうともせず、ただ汽車が動いて居るから、安閑とその中で飯を食つたり、しゃべつたりして居るといふことは所謂醉生夢死の類であります。決して賢いこととは申されませぬ。

宗教の心

しかしながら、自分がごうしてこの世に生れて來たかといふことはどんなに學問が進歩してもわかることではありません。又、これから先き、ごうなるか。どんなに我々の知識が進歩してもわかる

ことではありませぬ。しかるに、それがわからぬで濟む譯は決してありませぬ。そこで我々が現在の相に眼が覺めて、さうして深く考へて見るときに、我々の考といふものも何等役に立つことのない場合があるといふことが誰にでもわかるのであります。さうして、この場合に、我々は我々の心に自から現はれるところの宗教といふ心のはたらきがあらはれて、それを解決するものであります。固より人間の學問には色々ありますけれども、しかし「我」といふものが何處から來て、何處へ行くか、さうして「我」といふものはどんなものか。そんなことをば十分に我々に説明する學問はありませぬ。言ふまでもなく學問は智慧のはたらきでありまして、我々が思考の力によりて發展せしめるものであります。宗教はさういふ人間の考を離れ、さういふ人間の智慧を離れ、さうしてその心の奥底から自から湧いて出るところの感情によりて、さう信じなくてはならない、さう思はなくてはならないやうな心持がそこに現れるのでありますから、智慧で證明することも要らなければ、考によりてそれを正して行くことも要らぬのであります。さうしても、さう信じなくてはならぬといふ感情が自から湧いて出ることによりて、今申したやうな問題をも直ぐに解決することが出来るのであります。

自己の責任

現在の我々は過去の自分の業の相續であるといふことを、他の言葉に直していふと、我々は、どうしてもかういふやうな現在の境遇に出て來なくてはならぬやうなことを自分がしたためにこゝへ出て來たのであります。それ故に、一切の責任は皆自分が負はなくてはならぬことは勿論であります。この世へ生れて來て、さうして死ぬまでの間、自分の心に色々なことがあらはれるのでありますけれども、それにつきては一切全責任を自分が負はなくてはならぬのであります。苦しいといふこともありませう、悲しいといふこともありませう、心配することもありませう、けれどもその責任は決してこれを他の人に譲るべきものではありません。自分でこれを始末をして行かなくてはならぬのであります。前に申した十二因縁は、むつかしい言葉を以て、むつかしい理窟が説かれてあるやうであります。その意味は因縁が和合して、さうして一切のものが出来るといふことに歸著するのであります。釋尊の當時にありては世の中の一切の事物が出来るといふことに就て、いろ／＼の説がありまして、其中でも自在天といふ神がこれを造つたといふ説は最も廣く行はれて居つたのであります。それから、誰が造つたともなしに、ごうかして出來たといふやうに考へたものもあつ

たのでありますが、釋尊はそれ等の説を全く排斥して、世の中の一切の事物が出来るのは、原因といふものがあつて、さうして出来るものである。出来るべき原因がなくては何ももの出来るものでないといふことを強く唱道せられたのであります。「我」といふものも、出来る原因があつて出来たので、決して偶然に「我」といふものが出来るのではありませぬ。さうして「我」が出来たのは全く我々の過去の業によるものであります。

業 報

因縁が和合して、さうして一切の物が出来るといふことは結局、業報が輪廻して、前にしたことの結果が後にあらはれるものであると考へねばならぬのであります。「業報」といふ考は釋尊以前から、印度に行はれて居つたのでありまして、今現に悪いことをすれば未來に必ず悪い結果を得る、現在の悪は前の悪業の結果に外ならぬのである。畢竟前に悪いことをしたから今現に悪い報を得たのであると考へたのであります。因果の法則は争はれぬことでありますから、今の悪い結果が前の悪い原因に本づくものであるといふことは明かに認められることであります。

我と業と

しかしながら、釋尊以前の人々は「我」といふものを一個獨立のものとして考へて居つたので、「我」といふものがあつて、それが因果の法則によりて當然その報ひを得ると考へたのであります。釋尊の説かるるところでは「我」といふ獨立のものは無いのでありますから、「業報」といふことの考も、その以前の考とは大變な違ひであります。今日でも「我」といふものに執著して居つて、さうして、何かにつけて「業報」だといふものが多いのであります。その心持は釋尊の言はれるところの「業報」とは違つて居るのであります。釋尊が言はれるのは「無我」といふ考の上に立ち「業」といふものを考へ、さうして「業報」と言はれるのであります。「我」といふものの上に「業」を説くのと、「我」は無いとして「業報」を説くのとは大に相異して居ることは無論であります。

五蘊の集散

釋尊の「業」につきての説明は種々のお經に載つて居りますが、「大乘涅槃經」の中に釋尊の言葉が、『例へば燈火がつくと暗がなくなり、燈火が消えると暗が生ずるやうに、衆生の業果もその通り

である』とありますが、それは今の五蘊といふものがなくなりて、別の五蘊といふものが出来ること、
 説かれるので、五蘊が分れるから死ぬる、それから又別の五蘊が集まると、それが再び生れるので
 あります。固よりこの身の五蘊といふものは消えてなくなるのではありませぬから、又集まりて次
 のこの身を造るのでありますが、それが「業」といふものはたらきによるとせらるるのでありま
 す。たとへて申せば、今我々は斯うして生きて居りますが、早晚死ぬるのであります。死ぬるので
 ありますけれども、しかしながら、我々の身體を造つて居るところの根本のものは死ぬることはあ
 りませぬ。早い話が、私の身體は炭素か水素か、さういふ原素の澤山から出来て居りますが、たと
 ひ、私の身體が無くなりましたしても、炭素や水素などは決してなくなるものではありませぬ。ただそ
 れが分離するだけでありまして、又一緒になることがありませう。さうして、さういふやうにす
 るものが「業」であると説かれるのであります。

業の説明

そこで、「業」といふことにつきて、ここに一應の説明をせねばなりません。「業」といふことは
 「行爲」の意味でありまして、それは廣い意味で言ふのでありますから、手や足など、身體で行ふ

ものと、それから口で行ふものと、それから心で行ふものとこの三つがあります。これを身・口・意
 の三業といふのであります。例を擧げて説明しますと、私共が何か考へる、或は何か思ふ、さうす
 るとそれが外に出なくとも、側の人には判らなくとも、或は自分にそれが判らなくとも、それが長
 く消えることがなくして、我々の生活を支配するものであります。つまり我々の身・口・意のはた
 らきはその後の生活の上にその影響を及ぼすものであります。身體で以て何事かをして同じこと
 であります。人の知らないやうにこつそりやつても、或は自分の良心を胡麻化すやうなことをやつ
 ても、或は大びらに人の眼に見えるやうに何かしても、その影響といふものは長く自分の心を支
 配するものであります。何か言ふときもさうでありまして、それが何時までも消えないでもつて、
 自分の生活といふものがそれによつて支配をせられて居るのであります。このはたらきを「業」と
 いふのであります。それ故に「業」といふことは勿論行爲に外ならぬものでありますけれども、し
 かもその行爲を道德の心持にて、深く觀照しての後に始めて言はるべき言葉であります。

自覺の極致

かういふやうに考へて見れば、「業」といふことは全く自覺の極致であるといふことが出来るので

あります。全體、我々は、することは自分にするけれども、それにつきての責任といふものは、これを他の人に譲らうとして居るのであります。全く責任といふものをば自分に負はないやうにと望むで居るのであります。それ故に釋尊が言はれる「業報」といふことははつきりとわからぬのでありませう。我々は常に自分といふものに執著して、固より常一主宰のものでないところの自分を最負して、所謂身最負といふことを強くするが故に自覺といふことが十分に出來ぬのであります。そこでこの「業」といふことも、執著して居るところの「我」が満足するやうにと考へて行くために「業報」といふことも要するに「我」を維持するために過ぎぬものであります。

業の思想

釋尊が説かれる「業」といふものは、かやうに徹底したる自覺の心の上にあらはれるものでありますから、普通に世の人々が考へて居るやうに、自分の心の苦しみを除くために「業」といふものを假りに造つたり、或は「業」といふやうな別個のものをそこに考へて、さうしてそれを以て自分の心に蓋をしたり、或はあきらめたり、或は自分の心を胡麻化すために使ふべきものではないのであります。すべて我々が業報の結果であると考へることは「我」の執著を離れるところにその意味

があるので、「我」に執著して、しかもすべてが「業報」の結果であるからと考へることは、釋尊が説かれたる「業」の考とは大變に違ふのであります。

業力・業因・業有

「華嚴經」の中に世界の出來るといふことを説いてあるところに、一切の諸々の國土は皆業力に従つて生ずといふやうなことが書いてありますが、それに據ると、世の中の一切のものは皆業の力から生ずるといふのであります。それから「成實論」の中には『一切生法皆屬業因』と説いてあります。一切の生ずる法は、皆業因に屬するものであると言つてあります。世の中の一切のものが出來るのは「業」といふものがその本になつて出來ると示されたのであります。それから「業有」といふ言葉もあります。それは

『業者。謂。身口意所作善惡之業。因能招未來善惡之業。果。因果不亡。故名業有。』
亦名行有 (七有之一)』

身と口と心との三つが造るところの善惡の業因は、能く未來善惡の業果を招くもので、その因果は亡びるものでないからこれを業有と名づけると説かれるのであります。身體で惡るいことをし、或

は身體でいいことをし、或は口でいいことをし、口で悪いことをし、或は心で悪いことをし、或はよいことをする。さういふよいとか悪いとかといふところの業因が未來にいいとか悪いとかといふ結果を招くものでありますが、業有といふのはそれが始終存在して居るからであります。

業縁・業果

それから又、業縁といふ言葉があるのであります。「法華經」の序に

『生死所趣因善惡業縁』

生死の趣くところ、善惡の業縁に因るといふのであります。趣く所といふのは行くところでありまゝす。つまり我々が生死の苦界を流轉をして居るのでありますから、その生死の苦界を流轉するといふことは全くよいとか悪いとかの業の縁に因るといふのであります。それから又、業果といふ言葉も用ひられて居るのであります。「成唯識論」に

『謂衆生有殺盜淫三種之業 而受其果報 故名業果』

衆生が殺生、偷盜、邪淫の三種の業をしてさうしてその果報を受くるのであるから、これを業果と名づくといふのであります。かやうに、業因といつても、業有といつても、業縁といつても、業

果と言つても、それは皆同じことでありまして、我々の心に善惡の業を造り、さうしてその善惡の業の結果を又自分で受けるといふのであります。自分で種を造つて自分で結果を受けるのであります。かやうに業の因果につきて説かれたところは要するに、身と口と心で造るところの業といふものの因は六趣と生死との果を招くといふのであります。六趣とは六道ともいひ、天道、人道、修羅道、餓鬼道、畜生道、地獄道の六つで、これ等は皆業のために招來するところのものであると説くのであります。六道が別に存するのでなく、皆自分でそれを招くものであるといふのであります。地獄といふものが豫め造られて居つて、そこに行くのではありません。地獄に行くといふことは我々の業因の結果であるといふのであります。地獄に墮ちるやうな行をするから、そこで地獄に墮ちると説くのであります。

地獄の有無

かやうに「業報」といふものを考へるとき、若し世の中に地獄がないといふ人があつたら、その人には必ず地獄がある筈であります。若し地獄があるといふ人には、地獄はある譯はないのであります。地獄がないといふやうに、憍慢の心を起し、さうして自分を省みないやうな人は必ず地獄有

の報があるのであります。これに反して地獄があるといふ人は自分を省みて自分は必ず地獄に墮つるやうな悪人であるといふ自分を省みて、一生懸命に正しき道へと精進するのでありますから、その行くところは地獄ではないのであります。若し自分といふものを内省しなければ、地獄に墮つることはないといふに決つて居ります。自分を内省したら、斷じて地獄に墮つると言はなければなりません。朝から晩まで悪いことをするものは地獄よりほかに行くところはないと考へらるべきであります。しかるに地獄に墮つることはないといふのは、全く自分を省みることが不徹底なるがためであります。

必墮地獄

誰人にしても、自分を省みるならば、自分の心の悪いといふことは直ぐにわかる筈であります。たとひ善いことをしたいといふやうな心持があつたにしても、それは決して善いことをしたのではない。悪いことをやめたいといふ心持が全くないのでないが、しかし悪いことはやむことがない。人のためにはかるといふけれども、退て考へて見ると、それは自分のためにはかるのである。人に對して親切にするといふけれども、それも畢竟自分の身が可愛いためである。人を助けて置けば自

分が助けられるといふやうな心持が必ず起る。少しでも人にものをやれば自分は大慈善家のやうな氣になる。それだから、少しく省みればどうしても地獄に墮ちるものと考へなければならぬのであります。地獄に墮ちるといふことは、つまり自分が悪いものであるといふことを知るといふことであります。何處かに地獄といふものがあつて、そこへ墮ちるといふやうに地理學的の地獄を考へることよりも、現在の行爲が悪ければ、その將來も悪いといふ因果の法則を考へることの方が必墮地獄の意味を明確にするものであります。そこで自分は悪いことをしないといふ人は、已に前にも申したやうに、必ず地獄に墮ちる人であるといはなければなりません。

六道輪廻

そこで六道を輪廻するといひましても、餓鬼道、修羅道、畜生道、地獄道などと、いろいろの所をぐるぐる廻つて歩くのではありませぬ。六道は自分の業因によりてあらはれるものであります。しかるに「我」といふものが獨立して存在すると考へる場合には、自分を離れて、餓鬼道があり、修羅道があり、畜生道があり、それをぐるぐる廻つてあるくやうに考へられませうが、釋尊の考へは決してさうではありませぬ。餓鬼道も自分の心が招く、畜生道も自分の心が招く、地獄道も自分

の心が招くのであります。これを平易に言へば、自分の心が餓鬼になつたり、畜生になつたり、人になつたりするのであります。

業は盡きず

釋尊がお弟子の**スバトラ**といふものに向ひて、『業が盡きれば苦しみが盡きると、多くの人は思つて居るけれども、それは實際さうでない。煩惱が盡きて初めて業といふものが盡きる、それだから業が盡きて苦しみがなくなるのではない。煩惱といふものがなくなつて初めて苦しみが無くなるのである。若し業といふものがなくならなければ解脱することは出来ないといふのなら、一切の人は残らず解脱することは出来ない。何故かといふに、過去にしたところの業といふものは今さら如何ともすることは出来ないからである』といふ意味のことを話されたといふことでありますが、いかにも過ぎ去つた昔に悪いことをしたことは今更それをどうすることも出来ませぬから、業といふものが盡きて、始めて苦しみから離れるといふことであれば、どんな人でも苦しみといふものから離れることは出来ぬことでありませう。

身口意の三業

釋尊が説かれた「業」の考といふものは大體、かやうなことでありますが、佛教が開けていろいろの宗派が起りましたために、「業」といふことにつきての説明にもいろいろの考が加はりました。後には身・口・意の三業といふことが専ら説かれるやうになりました。その身といふのは身體、口は口、意は心でありまして、身・口・意のはたらきをば三業といふのであります。一に身業、これは身のおこなひ、二には口業、言葉のおこなひで又語業といふのであります。三に意業、こころのおこなひをいふのであります。『一に身業、即ち身が作るところの業なり』とありまして、身體で作るところの業でありまして、これに善いものと悪いものとある。『善あり、悪あり、若し殺生、偷盜、邪淫、すれば即ち身の悪業なり』『若し殺さず、盗まらず淫せざれば即ち身の善業なり』とあります。『二に語業とは即ち口に説くところの業なり。善あり、悪あり、若し妄言、綺語、悪口兩舌せば、即ち口の悪業なり』『若し妄言せず、綺語せず、悪口せず、兩舌せざれば、即ち口の善業なり』とあります。『三に意業、即ち意の起すところの業なり。善あり悪あり、若し貪欲、瞋恚、邪見を起せば即ち意の悪業なり。若し貪欲せず、瞋恚せず、邪見せざれば即ち意の善業なり』とあり

ます。かういふ風に業の説明がせられて居るのであります。

表面の解釋

「業」といふことの説明を聽いて、悪いことをすれば必ず悪い結果がある、善いことをすれば必ず善い結果がある。それ故に悪いことをしないやうに、さうしてよいことをするやうに、つとめなければならぬと、かう知ることとは、結局教訓として、それを受取つたのであります。

實行不能

言ふまでもなく、教訓といふものはそれが實行せられて後ち始めてその價值が認められるものであります。悪いことをすなといふ教訓は知つて居つてもどんくといふ悪いことをする、よいことをしろといふ教訓を聽いて居つても、決して善いことをしないといふやうでは仕方がありません。そこで教訓を聽いて、これを自分の問題として考へるとき自分には到底その教訓を實行するの力がないとかう考へる人は、それは内省の深い人であり、内省して實行するの力がないといふのは、それを實行せねばならぬと努力して自分の力の足らぬことを痛感するがためであり、實行が不能であるからと言つてこれを放置するのではありませぬ。實行不能といふところに、自分の内面を反省するのでありますから、そこに教訓を聽いたために、自分の相を知ることが出来るのであります。

運命

「業報」といふことは、かやうに、内省が徹底するとき、必ず宗教の心としてあらはれるものであります。若しさうでない、『前』に造つた業の結果だから仕方がない、『因果應報だ』、『定業だ』或は『親の因果が子に報ひ』といふやうなことになる、『運命』の説に同じやうな「業」の考になるのであります。すべて自分のしたことをば他の人がしたやうに、自分の責任を避けてこれを他に譲らうとするのであります。今日佛教を奉じて居るといふ人の中にも「因果」といふことをよくいふのでありますが、『それは業だから仕方がない』と捨鉢になる場合が多いのであります。少なくとも「業報」といふ考によつて自分の苦しさを諦めやうとするのであります。この場合、「業報」といふことは「運命」といふことと同じ意味に取られるのであります。さうして、かういふ考は決して宗教的のものではありません。結局自分を壊さないで、さうして自分

にはころびの出来たのを縫はうとするのでありますから、それでは決して宗教の心になるわけはないのであります。

蜘蛛の話

『心學道の話』の中に『蜘蛛といふ虫は膜を張るのでも、考へて見なされ。あちらの木の枝からこちらの木の枝に蜘蛛が膜を張る。さうすると見て居るといふと、蜘蛛は羽根もなければ飛ぶことも出来ないから、尻尾の方から糸を出すといふことだけ生れつき持つて居る。そこで初め尻尾の方から糸を出したのを木にひっかけ、ひつかけることが出来たらずつと下る、下るといふと、そこに風が吹くと風に吹かれた儘、向ふの木に渡る、さうしてグル／＼と膜を張る。ぶらりつと下つて居るばかりで自身からこちらの木の枝へ飛ぶとも糸を懸ふとも爲はせぬじや。それがかの君子は居易而以俟命といふもので、只糸を延ばすだけのわが受前の道を十分勤めて居るばかりで、それからあとの成るならぬは只天命の風にまかせきつて居るじや。さうするといづれどちらからぞ天命の風が吹いて来るゆへ、その時その風にしたがふて向ふの木の枝へチヨイと取付それからその糸をつたふてあちらへ渡りこちらへ引ぱりしてあのやうな大造の膜をはる。所が人間はさうしない、人間も

その通りであるべき筈だけれどもさうしない。さうして自分の道といふものを守つて居ればよい筈でありますけれどもさうしないで、何だ蚊だと言つて自分の欲にまかせて事をする。どれも是れもよくない。よくない結果自分に悪い報ひがやつて来る。その段になつて、ああ、何とせふ、是も天命じや、ヤレ／＼天命といふものはなさないものじやなどと我からなした造地獄とは夢にも知らず天道様をうらみたり人の身の上をうらやんだり、又遠い田舎などでは後生願ひの今生惡といふものがあつて、この世はわづかの境界なればどうしても濟事のやうに心得、親には不孝をし主人には不忠をし、夫婦げんくわ兄弟いさかひ密夫するやら人をたぶらかすやら、喧嘩をするやら博奕をうつやら、又いろ／＼な工夫をたくらんでは御上へ御苦勞をそなへるやうな事したり、人の訴訟事を聞いてはそのしりおしをしたりして、あげくのはてには縛られたり、擲かれたり肆れたり首切られたり、それをこゝには桎梏にして死するものといふてあるが、桎梏とは足がせのこと、梏とは手がせの事じやが、そのやうな足がせや手がせの苦しみを受けて死ぬるが正眞の天命といふものでないから正命に非ずといふておかれたが、それをやつぱり我自力でこしらへた事とは思はずそのやうな手がせや足がせの苦しみを身に引受けた時に何と思ふぞといふと、ヤレ／＼おれはこのやうに成るつもりではなかつたに、口惜しい事をしたア、何とせふ、これも過去生の因縁じやの、あれも前生の

御約束じやのといふて居るが、何のそのやうな忌々しい御約束して生れるものが、何所の世界にあるものか。』といふ意味のことが説いてありますが、如何にもさうであります。悪むいことをして、正しからざる日を送つた結果、それが目の前に悪むい結果となつて現れたときに、苦しい／＼とさわざ、さうしてそれが天命じや、運命じや、因果應報だ、業報だなど言つて責任を逃がれようとするときに、宗教も何もあつたものではありません。

おしも女

むかし、大阪の在、河内の八尾木の善立寺の門徒に木綿屋利右衛門といふものがあつて、その娘におしもといふものが居りました。年は僅に八つでありましたが、生れつき非常に柔和な子供で、佛教の話を聞いて普通の子供と異つた氣分を出したのであります。その住職は正空といふ人でありましたが、その正空師に向ひておしもがいろ／＼話をして居る中に、『自分のやうな罪の深いものは阿彌陀如來の御本願があるといつても、とてもたすかるものではないと自分は思ひます。それはどういふ譯かといふと、私は近頃お寺に參つてお説教を聽聞しますけれども、昨年の正月近所の友達と一緒に或る家に參りまして、紙燈の抽出にあつた錢を人の知らぬやうに一文盗み取つて、さうし

て菓子を買つて食ひました。それから間もなくお寺に參つてお賽錢が一文あつたのを拾つて又菓子を買つて食ひました。かういふ盗をするものは黒繩地獄の業だと承つたのであります。大變に自分が悪むかつたといふことを後悔をして、そこで前に取つた一文と後に取つた一文と二文佛さんの前に返しました。しかしながらさういふ悪むいことをしたものでありますからとても阿彌陀如來は自分を助けては下さるまいと思ふ、どうしたらよいでしやうか』とかう正空師に聞いたのであります。正空師も何ともいふことが出来ない、ただ念佛を申して居られた。暫らくして『いやお前が二文金を取つたといふことはまことに悪むいことに違ひないけれども、しかし幼な心にただ菓子が食ひたいために、そこにある金を取つたので阿彌陀如來の本願はさういふものも矢張り漏らさぬとあるから、その罪は恐るゝには及ばぬ、悪むい事をするのがいいとは言はないけれども、しかしそれほどに慚愧すれば罪の深いものも、必ず佛はお助けになるだらう』と言つて、さうして説諭せられたところが、おしもは非常に喜んでそれから喜んでお寺に參つたといふことであります。しかるにその年の十月に大地震がありまして、内の家内は残らず家の外に出ました。ところがおしも一人は家中に居りまして、さうして御内佛に燈明を上げて念佛を申して居つたのであります。地震が鎮まつて皆の人が家に歸つて見ると、おしもが一人佛様の前に坐つて念佛して居る、『あぶないのになせ出

なかつたか』といふと、おしもが言ふのに『定業であつたら家の外に出ても死ぬる、家の内でも死ぬる、同じ死ぬなら家の外の地べたで死ぬるより佛さんの前で死ぬることが自分には希望である』とかう言つたといふことであります。

おしもが「定業」であると言つたその「定業」の意味が、果して前に申した眞實の宗教の心持であつたか、どうかといふことは固よりはつきりとわかることではありませぬ。しかし、それは普通の人が考へて居るやうに、「定業」といふものが自分の心の外に別に存在して、それに自分が支配せられるといふやうに運命とか天命とかといふものと同じやうな考かと思はれます。さうすればそれは決して宗教の心からあらはれる業の思想ではありませぬ。

五〇

宗教か道德か

普通に世間の人々が宗教といふものは、それが一つの教のやうに考へられるものであります。又教のやうに説く人もあります。しかし、宗教といふものを一つの教と考へることはそれは大きな間違であります。宗教をば一つの教として取扱へば、結局それは道德の軌範と全く同じことであります。固より道德の規範といふものは人間の生活の上には極めて必要のことを説くのでありますか

ら、その教を守らなくてはならぬといふことは申すまでもないことであります。けれども、さういふ道德の教を守らねばならぬために起るところの苦しみはどうか。その苦しみは道德のために起つたものでありますから道德によりてこれを除くことは出来ないものであります。元來が道德の規範に對して不徹底であることを自覺したために起るところの道德上の苦しみでありますから、道德ではそれを如何ともすることの出来ないのは當然のことでありませう。そこで宗教はさういふやうな人間の道德の心持を離れ、人間の知識や思考を離れたところに自から起きて来る心持でなくてはなりませぬ。かやうに、自から起きて来るところの宗教の心持はこれを出さうと思つて出るものではありませぬ。けれども必ず出さなければならぬ心持であります。

人間と宗教

宗教はかやうにして、人間が文化の生活をなして居る以上、必ず起きて来るところの心のはたつきであります。宗教のはたらきがあつてこそ、人間が道德の世界に住んで眞實の道を進んで行くことが出来るのであります。しかるに、宗教のことにつきては世間の人の考へに間違ひがあるやうでありますから、そのことをよく理解していただくやうにと私はお話を致して居るのであります。こ

の意味で、『釋尊の教』と題してありますが、それは釋尊が説かれたその教を宗教の意味で我々が受取つて行くのは、どうすればよいかといふことを主としてお話を致すのであります。

自分のものとする

釋尊の説かれたる教を宗教の意味にて受け取ると申すのは、つまり、釋尊の教を自分のものとするといふことであります。たとへば、釋尊が悪しいことをやめて善いことをせよと言はれる。釋尊の言葉が「法句經」に擧げてある内に『衆善奉行、諸惡莫作、自淨其心、是諸佛教』とあります。諸の善いことをせよ、悪しいことをすな、自からその心を淨くするのが、佛の教であると斯う説かれたのであります。釋尊の教はつまり廢惡修善の四字に歸著するのであります。そこで釋尊が悪しいことをやめて、善いことをしろと言はれるから、そこで悪しいことをやめて善いことをしようとする考へるのは、考としてはまことに結構なものであります。又さう考へるのが當然でありませう。しかしながら、それではそれが自分のものとはなつて居らぬのであります。すなはち現實の自分の心の相になつては居らぬのであります。ただ廢惡修善をばつとめて行ふと考へただけのこととであります。釋尊が廢惡修善の教を説かれたから、それで釋尊の教の通ほりにやらうといふ考が

そこにあらはれただけのこととあります。釋尊が説かれた教が私のやうなものにありて私のものとなるのは、私はどうしても悪しいことをやめることが出来ないと知るときであります。釋尊の教を聞いて、さうしてその中で自分のものとなつて居るものは何であるかといへば、それは悪しいことをやめることが出来ない自分の心の弱いこととあります。これが釋尊の教を聞いて自分の相をかへり見て知られるところの私の有りの儘の状態であります。

理想と努力

兎も角も道德といふものは理想といふものをちやんと向ふに置いて、それに向つて進んで行く努力であります。努力してもそれが實行出来なるときには何の用をもなさぬのであります。口では偉さうなことをいふことが出来ませうけれども、それが行ひに出て来ないのであります。行ひに出て来なければ道德の價値は甚だ少ないものであります。理想に向つて進むところの努力はまことに結構でありますけれども、理想に對すれば我々はますます理想と遠ざかるものであるといふことを知るのであります。さういふ道德の相に目の醒めたときに、そこに宗教といふ心のはたらきがどうしても起きなければならぬのであります。さうして我々はこれによりて矛盾の多い道德の世界に眞實

の道を進んで行くことが出来るのであります。

五四

身體的苦行

釋尊は皇太子の時に發心して宮城を逃がれ出られてから六年程の間は非常に苦しい修行をせられたのであります。當時の印度にて行はれたる教にては、我々の心のはたらきが正しくあらはれないのは身體のためであるから、先づ身體の感覺を調べることを必要とすると考へられたので、そこで、身體のはたらき、殊に感覺を鈍くするやうな意味で、苦行といふものをやつたのであります。著るものも著す、食ふものも食はぬといふ苦行でありますから、釋尊も始めそれをやられて、その結果はごうであつたかといふと、それはただ身體が衰弱するばかりでありまして、心のありさまは元の通ほりでありました。そこで釋尊はそんなことでは駄目だとさとられて、根本の問題に返られたのであります。根本の問題といふのは我々の心の内の問題であります。釋尊は心の外に出でて身體的苦行をすることをやめて、自身の心の内に立ち戻り、深く考へられた結果、遂に道を得られたのであります。

成道

釋尊はかやうにして、苦行をやめて、冥想に入り、因縁の法を明かにして、遂に道を得られました。佛教の書物にはこれを釋尊の成道としてありますが、釋尊は前に申した十二因縁はこのとき考へ出されたものであります。深く心の奥底に入りて冥想せられた結果、さとりを開かれたのであります。それから六年の後に始めて自分の生れた所に歸りて、自分の親の王様に對して自分でさとられたところの法を説かれたのであります。さうしてその説法の意味は大體『人間の世の一切のことは皆自業の果報である』といふことであります。すなはち自から行つたことの結果を自分が受けるのであるといふことであります。

業は離れず

自から行つた結果といふのは「業」であります。既に前にくわしく申した通りに、自分の心と口と體とのはたらきによりてあらはれるものでありまして、これは自分に喰付いて離れないものであります。我々はこの「業」によりて六道を輪廻するのであります。釋尊の當時の印度の人々は自在

天といふ神が、人間を造り、世の中を造つたと考へたのでありましたが、釋尊はさういふ造物主を認めず、何物も何人も皆因果の法則によりてあらはれたのである。原因なくして結果がある譯はないと説かれたのであります。今、我々がこの世にあるといふことは、我々がどうしてもこの世に出て來なければならぬ原因といふものを持つて居つたから、それでこの世の中に出て來たので、その原因は何かといふと、それは自分の言つたことや、考へたことや、行つたことが集つて「業」となつた、その結果として我々はこの世に出て來たのであります。それが又この世で「業」をつくるために、その「業」といふものが又集つてこの後にも必ず我といふものを造るのであります。さうしてその「業」といふものは決して自分を離れるものではありませんぬ。

一人四婦の譬

「阿含經」と申す御經は、釋尊在世の頃、その側に居つたお弟子が聞いたところを書いたものであると言はれて、佛教で一番内容の古いお經であります。その中に一人四婦の譬といふものが擧げてあります。それは或る所に四人の婦を持つて居る人がありまして、その第一の婦は夫が最も愛するものであります。立つても座つてもはたらいて居るときでも休んで居る時でも、決してその

側を放したことの無いほどに大變に寵愛した婦であります。欲しい著物も買つてやり、行き度い所に連れて行き、食べたいものも食べさせて、まことに寵愛宛まりないものであります。第二の婦は艱難辛苦して人と争つてまで得た婦であつて、それを側に侍らして、言葉を交して居りました。けれども、第一の婦ほどには寵愛してゐなかつた。第三の婦は時々會つて慰め合つたり、仲よく話し合つたりして居る、そして一緒に居ると互ひに倦く、離れて居れば互ひに想ひ合つて居る仲でありました。第四の婦は殆ど下女と變らなく、すべての激しい仕事をさして凡ゆる苦しい場所に居らしめたのであります。しかも夫の心の儘に立ち働く、まことに殊勝なものであるけれども、それに拘らず夫から何の愛撫も受けず、やさしい言葉もかけられない、夫の意中にはこの第四の婦の存在といふものは殆どないと言つてもよろしいのであります。ところが、或る時その人が自分の住んで居る都を去つて遠く外國に旅をしなければならぬといふことになりました。そこで第一の婦を呼んで、自分はこれから遠い外國に行かなくてはならないが、お前も私と一緒に居つてくれと言つたところが、その婦が言ふのに、私はあなたと一緒に外國に行くわけには行きませぬ。そこでその夫が一番寵愛して居つた第一の婦と一緒に居かうと言はぬのでありますから、ひどく感情を害した、けれどもどうしても夫の言ふことをきかない。『あなたがどんなに私を愛して下すつても、私はあ

なたと一緒に外國に行くことは嫌だ』と、どうしても行かうと言はぬ。そこで仕方がないから第二の婦と一緒に行かうと言つた。さうするとこの第二の婦も亦『私は嫌だ』と言つて夫の言ふことをきかぬので夫が言ふのは『自分がお前を得るためにはどんなに苦勞したかわからぬ、それにどうして一緒に行かれないか』と言ひますと第二の婦が言ふのに『それはあなたが勝手に苦勞をして自分を求めた、あなたの勝手だ、自分の方からあなたに頼んだのではない。遠い外國に行くのは嫌だ』と言つて應じませぬ。そこで仕方がないから第三の婦に一處に行かうと言つた。ところが、『私はあなたのお世話になつて居るから、この都の外れまで行きませう、それから先は嫌である』と言ふ。夫は益々その婦の無情を恨んだのでありますけれども、仕方がない。そこで第四の婦にその譯を話したところが、第四の婦が言ふのに『私は両親の下を離れてあなたの所に仕へ申して居る身分だからどんな所にも行きませう。苦しからうと、苦しうあるまいと、さういふことはかまひませぬ。何處までも行きませう』と斯ういふことで結局その夫は自分が可愛がつて居るところの三人の婦と一緒に行くことが出来ないで、心に染まなかつた第四の婦を連れて外國に旅立ちすることになつたといふのであります。

人間の心

釋尊はこの話をした後、これは譬である、その都といふのは人間の世界のことを言ふのである。遠い外國といふのは死んで行く國のことをいふのである。第一の婦といふのは人間の身體をいふのである。第二の婦といふのは人間の財産のことをいふのである。第三の婦といふのは父母や、妻や、兄弟や、親族や、友達やなどをいふのである。我々は自分の身體を一番可愛がつて居るけれども、死ぬるときにはそれはついては來ない。それから財産といふものをも可愛がつて居るけれども、死ぬるときにはついては來ない。父や母や、妻や、兄弟や、友達やなども生きて居るときには親しくついて居るけれども、死ぬるときには一人として來るものはない。第四の婦といふのは人間の心である。天下に唯一人として自分の心を寵愛すること第一の婦の如くなるものはないであります。しかるにこの心のみは死ぬるときにも自分について來て離れないのであると説かれたのであります。

心の愛護

そこで釋尊は『皆心を放ち、意を恣にし、貪欲をつのらせ、瞋恚を燃し、正道を信せず、さうして命終つてから地獄に墮ち、餓鬼となつて苦しまねばならぬ、これ皆意を愛護しなかつた結果である、道を守り心を端し意を正し、愚痴の心を去り、愚痴の行をやめれば悪を行はない、悪を行はなければ殃を受けない、殃を受けなければ生を受けない、生れなければ老いず、死なず、遂に無爲涅槃の道を得るであらう』と説かれたのであります。まことに釋尊の説かれた通ほりに、人間の世の中といふものは皆自業の果報であります。死ぬるときには何物もついては來ない、ただどこまでもついで行くのは「業」のみであります。命がある間は、身體ははたらいで居るけれども、命がなくなればたちまちに消えるのであります。けれども消えないのは「業」であります。さうして、その「業」といふものは何時までも自分といふものを傳へるものでありますから、釋尊の説かれるやうに、我々は我々の心を愛護せねばなりません。

六〇

造業四種

そこで、又「業」のことにつきて、繰返してお話を致すのでありますが、古いお經に衆生が「業」を造るに四種あることが説いてあります。

『佛言衆生造業有四種』。

現報。今身。作極善惡業。即身受之、是名現報。

生報。今身。造業。次後身受是名生報。

後報。今身造業次後未受。至第二第三生既去。受者。

無報。猶無記等業是。』

(如優婆塞戒經)

この意味は衆生が業を造るに四種ある。現報と生報と後報と無報とがそれである。現報といふのは今のこの身で以て極めて悪い、或は極めて善い業を造つて、それでその結果をその身に受ける。それを現報といふのであります。生報といふのは、今その因を造り死後に報を受ける、今生に何か行ひをする、さうするとその次の生でその結果を受ける。それを生報といふのであります。後報といふのは、今この身體で業を造る、しかしながらそれが次の代に出て來ないで、第二、第三の生を終つた後に出て來る、これを後報といふのであります。無報といふのは結果が出るか出ないかわからぬ。さういふのを無報といふのであります。かういふ風に、「業」の報を考へることは智慧の上にとどまるものでありまして、眞實の意味にていふところの「業」を理解することは仲々容易ではありません。

種々の業

六二

夢窓國師の「夢中間答」の中に

『業ニ種々ノ品アリ。現生ニヤガテムクフヲバ順現業トナヅク。次生ニムクフヲバ順生業トイフ。順生ノ後ニムクフハ順後業ナリ。若シコノ三種ヨリモ輕業ナルハイツニテモ便宜ノ時ムクフベシ。カヤウナルヲバ不定業トナヅケタリ。輕重ニヨリテ遲速アリトイヘドモ、ツクリオケル業ノムクハズシテヤムコトアルベカラズ』

と説いてありますが、これによると、その業が重いか軽いかによりて、遅い速いはあるが、しかしながら造つて置いた「業」の報はないといふことはいふのであります。「業」といふものをさういふ風に説いてあるのを、迂濶に見ると「業」といふものは「宿命」又は「運命」と同じやうに考へられるのであります。「業」といふものが已に決つて居つて、その「運命」の下に支配されて居ると考へねばならぬやうになるのであります。「業」といふものが自分を縛るものと考へればそれは所謂宿命であります。勿論それは我々自身が造つたにしても、前世のことであるから、我々の運命といふものは決つて居ると言はねばなりません。我々が今貧乏をして居る。それは前の世に人のものを盗んだ、それだから今の世に貧乏をするものであると、さういふやうな考を起すやうになるのでありませう。

前世の約束

そこで、さういふ考は自分の氣に入らぬことを諦めるために都合がよいのでありますから「業」といふ言葉はさういふ場合によく使はれるのであります。たとへば自分が一生懸命にはたらいて金を儲けたといふやうなときにはそれが「業報」であるとは言はないでもすむが、自分のために悪い結果があらはれたときには、それは、「前世の約束」であるといふやうなあきらめの言葉を出さなければならぬのであります。又たとへば、『運がよかつた』といふ言葉は『悪いことを逃れた』若しくは『善いことに遭ふた』といふ意味で、それは全く自分を離れたる力のやうなものを豫想して、かやうに考へるのでありませう。

心の内の問題

「業」は自分で造るものであると説かるるによりて、動もすれば「業」を自分の心と切り離して考へるのでありますが、しかしながら、「業」といふことの眞實の意味は自分の心を道徳的にながめ

六三

てその罪惡深重を痛感するときにあらはれるものでありますから、「運命」や「定命」といふやうなものが自分の心の外にあると考へるべきではありません。全體、我々の運命といふものは我々が自分で開拓しなければならぬものでありまして、どうしても、これを心の内の問題として考へねばならぬことでもあります。自分の造つた「業」に對して我々はどこまでもその責任を負はねばなりません。しかるに、その責任を負ふのは嫌だから、そこで『運命である』と諦めやうとするところに結局「業」の眞實の意味からは離れるのであります。

乞食の子

大行寺信曉師の「山海里」の中に次のやうな話が載せてあります。

『あるとしの極月、雪ふりつもりたる寒夜に、大阪の日本橋を通ほりけるに乞食に施行の者と見えて、長町の方より粥遣ろくと呼び來る聲あり、手代調市出入方ともいふべきもの五六人にて、桶に入れたる粥をにないて北へはいるに、橋のあたりに寝て居る乞食ども起き上りて、その施行を受くる、その中に、雪しるの氷りたるに身を寄せてごへながらに寝入たる乞食の子あり、親なるものと見えたるがあはたしくゆすり起して、粥をもらひて食せよといふ、八九歳と見ゆるもの起き上りて、茶碗を出すに施行の若きもの粥をすくひてその茶碗へ山もりになるほど興へおきて、急ぎ通ほりて過けるに、この小供兩手ごへてありけるにや、はからず茶碗をとりおとし、氷りたる大道にて茶碗割れて、粥は地べたへうちあくる、親はあさましき聲を出してその小兒のあやまりをしかりける、粥よりは茶碗をわらしたることをいましめける、子供は泣くより外のことなく、そのこぼれたる粥をすこしにてもとちいさき手にてひろい見れど詮方なく、又うづくまりていねけるありさま、見るにしのびがたく、われはそのあたりの夜店にて茶碗一つとめ、薯芋のむしたるを一廉そへてあたへおきてかへりぬ、それ等は施行の善事をうらむるの道理にもなることなり、粥遣るさへ來たらねば、寝入りたる目をもさます茶碗をわらすこともなく、親の叱りもうけざるものと思ふなるべし、これらもいかなる業因の然らしむるものどもなるぞや』

乞食の子が寝むたいのを起されてお粥を貰つたのはいいけれども、手が凍へて居るから茶碗を落して壊してしまつた、親はお粥はごうでもよいが、茶碗を壊したことをひどく叱つた。若しお粥をやらうといふ慈善家がそこに來なかつたら眠むいのを起されもしないし、起きて茶碗を割らなくてもいいし、叱かれなくともいいのであります。これも自業の果報といふべきものであらうと信曉師は説明して居られるのであります。乞食の子供に起きて粥を貰へと親の深切に言つたのが却て仇となりて叱られ損となつのを外から見て、これは全くその子供の前業の結果であらうと言はれたのであります。

前業の所感

六六

信曉師は同じ書に、又次のやうな話を載せて居られます。

『京都にて講内の法席おはり、夜ふけて丸太町をかへりけるに、その席へいでたる同行のわれよりさきへ座をたちたる人に寺町あたりにて追つきけるが、その人のいへるに只今堺町西へ入るところにてあはれるものにあひたり、さだめて見たまいたるならんといふ。』

自分は何も気がつかなくつたといふと、その人が言ふのに、それは十四、五になる西國巡禮の女の子で母と二人で伊勢參宮をしてその歸へりに母親が途中で患ふて死んだ、そこでその娘が路銀も着る物も全く人に取られてなくなつてしまつて、もうこの四、五日飯も食はない。

『乞食すれども、食物の施しを得ざる故今日もまだ食せずといふをきいて、そばやあはれみて、もはや夜もふけぬればうどんもそばもうりきりて、ただ一膳賣のこりたるあり、ほどこすべしとてあたへければ、うれしげにそれを食して財布を出して今朝より七、八錢ばかりもらひたるあればこれをあたひにとりたまへとおしだす、蕎麥屋はそれにはおよばずこれは施行にするといへばそれでも賣りたまふものなるをと禮儀ただしくあつう一禮のべて別れた。』

今日は随分寒いからあの若い乞食も寒さが身にこたへて死にはしないかと思ふと話した。信曉師は

その話を聞かれて、不憫だから行つて見ようと言つて又後に戻られた。

『四、五丁たちかへり見たれども、もはやそのあたりにそば賣も居ず娘の行方もしれざりければ、せんかたなく自坊へかへり、その次の夜、又その邊に法座ありてゆきけるに、その家の主人は所用ありて出たりとて他行のことはりをいはるるにつきてその用事をきけば、今朝より町内にたをれるものありて先刻七ツ時分までに死きりたるやうすなり、きのふよりのさむさにてここへ死と見ゆるとの沙汰なり、年の頭をきけば昨夜の娘に必せり、あはれさ不便さ今にわすれがたし、定業とはいひながら、昨夜われに出會なば藏屋敷へ通じてなりとも兎角して本國まで歸しやることの方便もありたるならんと思へども、元來親子二人參宮思ひ立ち遠路を参りたる神信仰ののなれども、二人ともに他國にて倒れ死するほどの約束、大慈悲深き神慮にても救ひたまはりがたき前業の所感なれば昨夜我等に出遇はざるもよく、ここへ死する決定業のものなるべし。』

前にもしばしばお話致したやうに「業」といふことは自分の心の内の問題でありまして、心の外に「業」といふものが離れて居るのではありません。他の人のすがたを見てこれを前業の所感であるなどと考へることは釋尊が説かれる業報とは相違したものでありませう。自分の業の果報を自分が受けたのであると考へるところに「業」といふものは道徳的内省の徹底したものでありますが、他人の不幸を見て『あれは前世の果報だ』といふのは、全くそれと相異した考であります。自分が

六七

自分の行爲の結果だとかう深く感ずるところに自分の生活といふものに如何なることがあつても、それに對して責任を自分が負ふといふ心持が存するのであります。

心の現象

これまでお話致したことを更に深く説明するためには我々の心の現象につきて大略お話致す必要が有ります。佛教にて八識と申すのでありますが、その八識といふのは我々の心の現象のことで、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識及び意識の六識に末那識と阿頼耶識とを加へたものであります。それは感覺のはたらきから、尙ほ進むで知覺・觀念なども併せて、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識といふのであります。それから意識と申すのは眼・耳・鼻・舌・身識によりてあらはれたるものをばそれと知るはたらきであります。さういふ六つの識といふものは、全く身體自個のはたらきでありますから、身體があればはたらいて居りますけれども、身體がなくなるとそれ全部なくなるのであります。すなはち目がなくなつたら眼識といふものはなくなる、耳がなくなつたら耳識といふものがなくなる、鼻も舌も身體も皆同じであります、身體があつて現はれるはたらきであります。若し身體がなくなつたならばそれは一切なくなつてしまふのであります。身體がなくなりても、その心はなくなるものでないといふことは決して佛教では説かないのであります。

末那識

かやうに、我々の精神のはたらきは、眼識と、耳識と、鼻識と、身識と意識とからあらはれて來るものであります。それだから身體がありて、始めてさういふはたらきをするのであります。身體がなくなつたら、我々を見ることも出來なければ、聞くことも出來ず、嗅ぐことも出來なければ味はふことも出來ず、觸ることも出來なければ、何等辨へ知ることも出來ないと説かれるのであります。ところが第七の末那識マナシキといふものは、その心の奥にはたらくもので、『末那識は凡夫の心の底常に濁りて前の心は清く起る時も我身、我物といふ差別の執失せず、心の奥いつとなく醉るが如くなる』と言はれるのであります。亂れた心を我として認めるはたらきであります。我々一切凡夫の心の奥底は何時でも濁つて居る、さうしてその心のはたらきの起きたときに自分だ、自分のものだ、かういふやうに我に執着して行く心のはたらきが末那識であるといはれるのであります。

自己意識

かやうに自己に執着することはすなはち自己意識によるものであります。暑いとか寒いとかといふことを自分に感じて、それを自分が暑い、自分が寒いとすべて自分を中心に考へるのであります。暑いのは暑い、寒い時には寒いと感ずることは赤ん坊に見らるることでありますが、しかしながらそこに自己を意識することはありませぬ。それが精神の發達が進むに従ひて、自己を知る意識があらはれるのであります。そこに「我」といふはたらきが起るのであります。それは衝動のはたらきで、その本は世界の生きたもののすべてにあらはれるはたらきであります。人間にありてはそれが進歩して、自己意識となつてあらはれるのであります。

阿頼耶識

この自己意識が起るのはその根本が宇宙に存するのであります。佛敎の説によると、それは眞如があらはれるのであります。すなはち阿頼耶識といはるるのであります。佛敎では阿頼耶識は一切諸法の根本で、世の中の一切のものが阿頼耶識である、諸法の種子を攝して持てる心なりと言つてあります。阿頼耶識といふものが宇宙の一切の本であるとするのであります。たとへば目のはたらきによりて物を見る、さうしますると、それが種を阿頼耶識の中に残す、それが「業」とな

るのであります。物を味はふといふことでも、臭を嗅ぐといふことでも、何れにしてもその種が一つ／＼阿頼耶識の中におさまるのであります。それ故に阿頼耶識は一名を藏識ともいふのであります。かやうに、阿頼耶識は一切のものの本となつて、さうして又一切のはたらきを起し、さうしてその種をその中に藏めて、さうして又更にそのはたらきを起すものであります。

人の無我

かやうに、世の中の一切のものは皆、阿頼耶識からあらはれるもので、それが天地國土山河草木ともなると説かれるのであります。さうしてこの阿頼耶識は本より平等一如のもので差別の相はないものであります。しかるに末那識といふものはたらきで自分といふものがあらはれ、世の中の一切のものに差別の相があらはれると説かれるのであります。釋尊は大慧菩薩に對して先づ八識の話をしてさうして、斯ういふ風な心のはたらきであるから、そこで人の無我といふことと、法の無我といふことを心得ることが第一に必要であると説かれたのであります。人の無我といふことは、この身體を組立てて居るところの一切のものは皆「我」と「我所」^{ワガモノ}といふものから全く離れたものである、しかるに智慧の足りない凡夫の心として「我」といふ心、「我所」^{ワガモノ}といふ心、さういふ心に執

著をするのである。我々の境界といふものは阿頼耶識から現はれて來るもので、變りづめに變つて居るものだから少しも止つて居るものではない、丁度川が流れるやうに、燈火が段々と燃えて行くやうに少しも止つて居ない、ただそれが續いて居るから、ちよつと見ると同じものがそこに始終あるやうだけれどもさうでない。かやうに自分の境界といふものは全く阿頼耶識から出て始終變つて居るものだから、丁度人形を機械で動かして居るやうなものである。その譯を明かに知ることを、それを人の無我を知るといふのであると説かれたのであります。

法の無我

それから法の無我を知るといふのは、我々の身體も、我々の境界も、「我」といふものと「我がもの」といふやうなことに執著すべきものではないのに、執著の心が強くて、それによつて互ひに束縛してさうして自分でそれを積み集めて居るものである。「我」といふものや、「我がもの」といふものに、一つの自性といふものは決してあるわけのものではない。しかるにそれを本性を持つて居るものの如くに考へて、さうして「我」とか「我がもの」とかと執著の心を起すのは、全く智慧が足らぬためである。それだから、自分の心の他に何等境界といふものは少しもないといふことを知らなくてはならぬ。それを法の無我といふのであると説かれたのであります。

心の影

釋尊がかやうに説明せられたのを聽いて、大慧菩薩は釋尊に向つて『さうすれば私の身體も私の寶も、私の境界もただ心の影に過ぎないわけでありますが、然るに世の中にはさういふものが常に變らずにあるとかう説いて見たり、或は無いつとかういふ風に説いて見たり、いろ／＼に考へをいふ人々がありますが、それはどういふわけでありませう』と尋ねました。釋尊はその質問に應じて『心を離れて何物もある譯はない。すべてのものは皆心の影に過ぎない。それがあるものの如くに考へるのは、その人が濫りに計らふのだ、濫りに計らふことによつて無いのだ、それだから、あるといふのも無いといふのも皆その人が濫りに計らふのだ、そこで眞實にこの道を求めて進まふとするならば、四つの法を明かに知るといふことが肝腎であると説かれたのであります。

四種の法

四種の法といふのは、第一はすべてのものは自分の心から現はれるものであるといふことを知る

ことである、世の中の一切のことは皆自分の心から出るもので、三界は唯自分の心である。第二はもの事が生じたり滅びたりするといふやうな考へを離れて總てのものは夢幻のやうなものであるといふ本當の相を知らなければならぬ、第三は自分の心の外にあるところの一切のものが自性を持つてゐないといふことをよく知らなくてはならぬ。第四にはかういふ風に世の中の相といふものを明かに知つて、さうして本當の智慧を得るやうにしなければならぬ。かう釋尊は大慧菩薩に向つて懇々と説いて居られるのであります。

心を本とす

我々は自身の目のはたらきで物を見る、自身の耳のはたらきで音を聞く、自身の鼻のはたらきで物の香を知る、自身の舌のはたらきで物の味はひを知る、さうして自身の身體のはたらきで物に觸るるのであります。さうしてそれからしてそれを辨へ知るところのはたらきが起きて來るのであります。これがつまり我々の心の生活の有様で、苦しみもそれから起り、楽しみもそれから起り、家もそれからあらはれ、著物もそれからあらはれ、一切のものが皆それから生ずるのであります。世の中のすべてのことは皆、心を本とするのであります。固よりかやうに我々の心のはたらきが起る

のは全く因縁といふものによるので、たとへば眼識といふものも、目に觸れる縁があつて起ることです。因縁といふものがあつて、さうしていろんはたらきといふものをあらはし、それを末那識マナシキのはたらきによつて自分のものと考へて居るのであります。それ故に、前にも申したやうに、一切のものは皆自分の心の造作するものであるとかう考へることは當然のことでありませう。

我他彼此

ところが、我々は實際さういふ風には考へないのであります。若しさういふやうに、一切のものが自分の心の造作であると考へることが出來たならば、人ひとと自分自分と分けることことはない筈はずであります。世界と自分が別になるわけはなく、我も他も彼も此も皆一緒のものでなければならぬ筈であります。しかるに我々は實際、世界と自分を別のものと見て居りますから、我他彼此の考は常に強く起つて來るのであります。奥田頼杖の「心學道の話」の中に次のやうなことが書いてあります。

『佛法にも迷故三界城といふて、我といふ小さなかこひを拵へて籠るゆへに、世界のもの皆敵になりて、この身のせめ道具になる、助けらるはずのために苦しむ、私が只今かふ道話いたすに、高く上て自慢すると、みなさまが御にくしみなさる、是がべつ／＼になる様で御座ります、あやまつて下から出ると、人が憐んで下さる、

さらばとて詔ろふたり、媚たりするのではござりません、丁度屋根屋と、井戸屋が来て、仕事して居る時、晝めの時、屋根屋にはおりてめしをくわつせいといひ、井戸屋には上つてたべろといふ様なもの、兎角我慢は人が悪むゆへ、本来無東西のものに、東西南北の四方が出来て、迷ひといふものを建立したものの、夫故生れた時の赤子には此方が東、此方が西といふ事も何もない、夫故誰にもくむものがない、世界と一つもので、たつた一つの心、夫が年をとるに従ふてわる智慧といふものが出来て、おれが智慧、おれがからだ、おれが働く、おれがすると、おれがくといふものを組立て、りつばなおれといふ城廓を構へて、四方に大敵をうけて、夜討、朝がけすこしもあくる間のないくるしみ、云々」

まことにこの通りであります。よく八識の説明を聞いて見ると、總てのものが自分の心のはたらきによつて出来て居るのであります。さうしてその一切が自分を中心にあらはれて来るのでありますから、それは全く自分の心の影に相違ありませぬ。それを自分より區別して考へることはどうしても間違つた考であります。

眞理を知らず

我々は、人の無我と法の無我といふことを知らず、自分を獨立の小さいものとし、その周圍に自

分でないものを置いて、さうしてそれに對して何だ蚊だと言つて、騒いで居るのであります。たとひ八識の説明や無我の眞理を聞いても、我々にはよくそれがわかりませぬ。それは全く我々の智慧が足りないからであります。それならば、さうして智慧を研くことが出来るか、如何にして此の如き眞理を知ることが出来るやうになるかと申すと、それは到底我々の小智にては到達することが出来ぬ境地でありまして、我々は先づこの小智の世界を離れて、さうして大圓鏡智を得なければならぬのであります。

小智を棄つ

しかしながら、それは我々が考へてその境に至ることは出来ず、却て我々の考をば一切放棄して「自我中心」の心のはたらきを止めるときに自から現はれて来る心のはたらきであります。私はそれが宗教と言はれるものであると信じて居るのであります。前にも度々繰返して申したのでありますが、我々の心が自己意識を離れて起りて、それが意識せられるときに、始めて宗教の心のはたらきがあらはれるもので、宗教の心のはたらきが起るときは我々は愚悪そのまま如來の智慧の中に生きて居るといふことを感知することが出来るのであります。

かやうに、我々が自分の小智を離れることは、すなはち萬の法を觀察して、聖智を求むるに外ならぬものであります。前に申した八識の説明は、要するに我々の心のはたらきを明かにするもので、根本の識は阿頼耶識であります。たとへば海のやうなもので、この上に他の七識の波が起ると説かれるのであります。他の七識はすべての事物に對して、丁度、風が海の水を吹くやうにはたらくものであります。それによりて心の海にいろいろの心の波を起すのであると見られるのであります。八識の中にも眼識と耳識と鼻識と舌識と身識との五つの識はただ眼前の事物を寫すだけのことでありますが、意識のはたらきによりてそれを辨へ知ることが出来るのであります。我々の虚妄の心はすなはち、これによりてあらはれるのであります。その虚妄の心を認めて我とするのは末那識のはたらきによるのであります。さうしてそれは前にも申したやうに、第八の阿頼耶識の上にはあらはれる波のやうなものであります。

分別の見

一切の事物が皆、自分の心の分別から生れたものであると知るとき、我々は虚妄の心を棄て、無用の論議から離れ、邪の見を破ぶることが出来るのであります。さういふ境地に入りて、我々はすべての分別の見を去り正しき智慧をもつて道を修むることが出来るのであります。それ故に聖智を得るといふことは分別の見を起さぬことであり、佛をおがむといふことも要するに、この分別の見を離れたる心境を指していふのであります。佛教に八識のことを説くのも、畢竟、我々の心の眞實の相を知らしむがためのもので、これによりて我々は宗教の心のはたらきをあらはすことが出来るのであります。ただこれを理論として考へるときはまことに煩雜のもので、その意義が十分に理解せられるものではありません。たとひ、理解せられても實際には何の役にも立つものではありません。

感報の世界

此の如く段々と「業」のことにつきてお話をいたして、さて今、それをひつくるめて申すと、現在の我々の生活といふものは、過ぎ去つた永い時代に我々自身に造つた業因と、それから現在の生活にてあらはしつゝある煩惱とが、本となつて出来上つたところの感報の世界であります。要する

に、我々の世界は自分が造り上げた業の結果としてあらはれたところの世界でありまして、我々は實際さういふ感報の世界に生活して居るのであります。さうして、その生活が、現在に於て種々の業を造るのでありますから、その業が又未來の感報を招くのであります。これを他の言葉で説明するときには、我々の意志といふものが何處までも我々の生活といふものを造り上げて行くといふことになるのであります。まことに、我々の世界は我々の意志が造り上げた世界でありまして、この意志が何處までも我々の生活を規定するものであると、かう申す意味であります。それを佛教の言葉を用ひていふときは、過去の業因と現在の煩惱とによりて感報せられた世界である、かう申すのであります。

業報身

かやうにして、我々は煩惱を原因として、さうして今の業報の世界を造り上げたのでありますから、我々のこの身體は業報身であると考へねばなりません。實際、我々の自分の身體がどうして出來たものかといふことは我々にはわからぬことであります。又どうしてそれが出來るものかといふことも我々にはわかりませぬ。いくら考へても、かういふ身體が出來るといふことは我々の智慧でこれを説明することは出來ぬのであります。しかしながら、佛教の上から、宗教的にいふときには、それは全く自分の業によりてかういふ身體が出來たのであると考へることが至當であります。さうしてさう考へることによりて、始めて自分の重大なる問題が解決せられるのであります。

生死の海

過ぎ去つた時代に、自分が造つた業であるといふと、自分から離れて別にあるやうでありますけれども、それは決して自分から離れて別にあるものではありません。今の我々の身體に、過去の業が傳はつて居るのでありますから、そこで我々の身體といふものは我々の業が消えない限り、何時までも消えるものでないといふことは明かであります。この有様をば佛教の言葉にて生死の海を流轉するといふのであります。

念念相續

釋尊の言葉がお經の中に書いてあるのを讀んで見ると『元來一切の世界は初めあり、終あり、生あり、滅あり、前あり後あり、有り無し、聚ることあり、散ることあり、起ることあり、止ま

ることがある、相對の觀念が念念相續きグル／＼と往來し、種々に取り、種々に捨つる、これは皆輪廻である』とあります。凡そこの世の中のもの、初めのあるものは必ず終りがある。生れたものは必ず死ぬる。起ることがあり、或は起るのが止むことがある。生ずることがあり、滅することがある、聚ることがあり、散ることがあるといふやうに、皆グル／＼と輪廻するものであります。我々の心も全く同様で、相對の觀念が念念相つぎて消えたり、あらはれたりして、輪廻するものであります。

六道輪廻

此の如く、我々が生死の海を流轉することを、佛教にては六道輪廻として説かれて居るのであります。その六道といふのは、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道のこと、道といふのは我々の行くところであるから道と名づけるので、又これを六趣ともいひます。我々が趣くところであるといふ意味であります。固より我々の心が行くのでありますから精神上の問題であります、それを物質的に考へて、我々が死んでから後に旅行するやうに考へることは非宗教的であります。俗間によくやることでありますが、死んだ人を葬むる棺の中に錢を入れて、それを六道錢といふのでありますが、これは死んでから後に行く六道の旅行の費用にする意味でありませう。これは支那から始まつたことで宗教的に六道といふことを考へるときには、決してさういふ筋合のものではありませぬ。

往生要集

先づ六道輪廻といふことにつきて佛教の書物に説いてある通ほりのことをお話することが必要であります。そこで我邦にて廣く行はれたる書物を撰びて、源信僧都の「往生要集」に説いてあるところに據りて六道のことを大體お話致しませう。第一に地獄は奈落迦ナラガ又は泥梨ニリヤともいひ、六道輪廻の最下層にあるもので、最悪人がその苦報を受けるところであります。地獄には八大地獄とて八つあります、それは等活地獄、黑繩地獄、集合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄の八大地獄でありまして、皆地下にあり、最上層が等活地獄、最下層が阿鼻地獄であるとせられて居るのであります。さうして、此等の地獄に生るるものの惡業因縁並にその受るところの苛責の種類、程度、年限などは上より下に及ぶに従つて重きを加ふるものであります。

八大地獄

八四

等活地獄は地下一千由旬の處にありて、この世界にありて殺生の罪を犯したるものが墮つるところであるといふのであります。殺されたものの如くに己も殺されさうして更に生かされては又殺される。それで等活といふのであります。人間の九十萬年が地獄の一晝夜に相當し、長きものはここで五百年ほど生活をしなければなりません。等活地獄の中の罪人は互に害心を懷き、若し適ま相見るときは獵者が鹿に逢ふたやうに、鐵の爪で互に搔きむしつて筋肉が裂け盡きて、ただ骨だけになる、さうすると獄卒が棒を持つて頭から足の先まで打擲し、或は銳利の刀にて筋肉を割く。そこへばつと涼風が吹くと、生きて本の身體になる、或は空中に聲がありてこれ等の罪人を活かして故の如くせよとあればすぐに再び生きる。或は獄卒が鐵叉にて地を打ち活きよといへばすなはち活きる。さうして又互に搔きむしつて肉がなくなるに至れば獄卒が息を吹き返へすやうにするといふのであります。これはむかし物を食はり生きたるものを殺すものの墮つるところであります。

黑繩地獄は等活地獄の下にあるものであります。獄卒が罪人を熱鐵地に臥さしめ、熱鐵の繩にて縦横に身體をからめ熱鐵斧にて繩に隨つて身體を切割する。或は鋸にて解き、或は刀にて屠る。又熱鐵繩を懸けて罪人をしてその中に入らしめる。さうすると風が俄かに吹いてそれが身體にからみて肉を焼き骨を焦す。又左右に大鐵山ありて山上に鐵幢を建て、幢頭に鐵繩を張る、繩下に熱鐵を多く置き、罪人をして鐵山を負ひ繩の上より行かしめる、さう

すると鐵鏝に落ちて煮て摧かれるといふ。殺生・偷盜の罪を犯したるものがこの地獄に墮つるのであります。

集合地獄は黑繩地獄の下にあるところであります。多くの鐵山がありて、兩山が相對してゐる。獄卒手に杖を執りて罪人を驅りて山間に入らしめる。さうすると、兩山が迫り來りて、身體がその間にはさまれて摧けて血が流れる。或は鐵山が空中より落ち來りて罪人を打ち碎く。或は罪人を石の上に置き、巖を以てこれを押す。或は鐵臼の中に罪人を入れ、鐵杵を以てこれをつき碎く。或は大江の中に鐵鈎ありてそれが燃えて居るところへ罪人を墮とす。或は刀葉林に罪人を置いてその樹に上らしめる、その樹の葉は刀の如くにその身體を割くのであります。むかし殺生・偷盜・邪淫の罪を犯したるものがこの地獄に墮つるのであります。

叫喚地獄は衆集地獄の下にあるところであります。この地獄の獄卒は頭が金の如く、眼中から火を出し、赭色の衣を著け、手足が長大で、疾く走ること風の如くである。口に惡聲を出して罪人を射る、罪人惶れて頭を下げて哀願すれどもすこしも聞き入れず、或は鐵棒を以て頭を打ち、熱鐵地を走らしめ、或は熱鐵に入れて煮る。或は罪人を猛炎の鐵室の中に入れ、或は鉗にて罪人の口を開き洋銅を注入して五臟を燒爛せしめるといふのであります。これはむかし殺生・偷盜・邪淫・飲酒の戒を犯したるものが墮つるところであります。

大叫喚地獄は叫喚地獄の下にあるところであります。その苦しみの相は叫喚地獄と同じやうであるが、ただその苦しみの度が劇しく、大略これに十倍するものであります。この地獄は殺生・偷盜・飲酒・妄語の罪を犯すものが墮つるところであります。さうしてこの地獄には十六の別處がありますが、その一とつの特受鋒苦にては熱鐵利針を

八五

口舌に刺して啼哭することが出来ぬ。受無邊苦にては獄卒が熱鐵鉗を以てその舌を抜き出す、抜けば復た生じ、生ずれば復た抜く。これは妄語の果報であります。

八六

焦熱地獄は大叫喚地獄の下にあるところの地獄であります。獄卒が罪人を熱鐵地の上に臥さしめ、頭から足に至るまで、大熱鐵棒にて打ち板のやうにする。或は極大熱鐵の熱の上に置いて猛炎にてこれを炙ぶる。或は大鐵串にて身體を下方より貫きて頭にとほして反覆これを炙ぶる。この地獄はむかし殺生・偷盜・邪淫・飲酒・妄語・邪見の罪を侵したるものが墮つるところであります。この地獄に墮つるときは一切の身分皆悉く焼き盡されて、復た再び生じ、生ずれば復た焼きつくされるので、これは全く邪見の果報であります。

大焦熱地獄は焦熱地獄の下にあるところの地獄であります。その苦しみの相は焦熱地獄と同じやうであるが、その苦しみがそれに比して十倍ほど劇甚であります。むかし殺生・偷盜・飲酒・妄語・邪見の罪を犯したるものが墮つるところであります。

阿鼻地獄は大焦熱地獄の下にあるところの地獄で、欲界最底の處に位し、一に無間地獄と言はれて居るのであります。この阿鼻地獄は七重の鐵城、七層の鐵網の下に十八隔ありて、刀林周匝、四角に四の銅狗ありて、眼は電の如く、牙は劍の如く、齒は刀山の如く、舌は鐵荊の如く、一切の毛孔より猛火を出し、その煙臭悪く喩ふるに物なし。此の如く猛熾の火、焰をあげて來りて、罪人を刺し、皮を穿ち肉に入り筋を斷ち骨を破り、またその髓に徹し、焼くこと脂燭の如くにして、全身皆猛焰となるのであります。これによりて罪人が受くるところの苦痛に間隙なく、

ただ苦痛のために號泣する聲が聞えて罪人が居るといふことがわかるのであります。五逆（父を殺す、母を殺す、佛身より血を出す、和合僧を破る、阿羅漢を殺す）の罪を犯し、因果の道理を撥無し、大乘を誹謗するものが墮つるところがこの地獄であります。

餓鬼道

餓鬼道といふのは餓鬼が住むところで、二箇處ありまして、一は地の下五百由旬のところ、一は人間道と天上道との間にあるといはれて居ります。餓鬼にいろいろありますが、その一二の例を挙げますと、ある餓鬼は身體が非常に大きくて、人間の二倍位あり、顔もない、眼もない、手足は鑊カネの如く、焰がみち／＼と自分の身體を焼くのであります。これは鑊身といふ餓鬼で、むかし財を貪つて人を焼き殺したものがこの報を受るのであります。それから食吐といふ餓鬼は非常に身體が大きく、身の丈が高く、常に胸がつかへて苦しみ、それを吐かうとしても吐くことが出来ずして苦しむのであります。これはむかし夫である自分だけが美食をして妻子にはやらない、若しくは妻が夫に美食を食べさせなかつたものがこの報を受るのであります。それから食氣とは食物を得ることが出来ず、その香をかいで命をつなぐ。これはむかし、妻子などの前にて自分一人でうまいものを食つて居つたものが生るるところであります。その次に食法といふ餓鬼が居る、それは嶮岨の道を侵しても食物を求めそれが得られない。色は黒雲の如く、涙の流ること雨の如く、若し僧寺に至りて咒願說法の時に、此に因りて命をつなぐ。こ

八七

れは名利を貪ぼりて不淨の説法をしたものが生るところであります。その他いろ／＼の餓鬼がありますが、すべて人間の一月を以て一日一夜として五百年ほどここに生活するといふのであります。「正法念經」によれば、慳貪嫉妬のものが生れるところが餓鬼道と言はれるのであります。

畜生道

鳥、獸及び虫の類を畜生といふのであります。この畜生は害心をふくみて、小さきものは大きいものに吞まれ、弱きものは強きものにくらはれ、互に殘害して、苦しむことひるも夜もしばらくもやむときがないのであります。陸を行くものは獵師に殺され、水に住むものは漁者に殺され、牛や馬などは重荷を負はせられ笞にて打たれ、自分の心のままにはどうすることも出來ず、虫蛇の如きは闇の中に生れて闇の中に死し、蚤や虱の如きは人の身に生じて人に殺されるのであります。かやうに、いろ／＼の畜生は或は一時の間、或は無量劫の間、無量の苦しみを受るのであります。これは愚痴無慚にしていたづらに人の信施を受けてその施物をつくのはざるによりてこの報を受るのであります。

修羅道

修羅といふのは、常に諸天と戦ひてさん／＼に侵害せられ、身體を破ぶりその命を失ふのであります。毎日晝三度、夜三度の修羅の戦に、おめきさけぶ聲高く百千の雷の如く互に傷つき身を破り骨を碎き、流るる血は紅の波を起す。又刀劍などが自から來たりてその身を責め、害をなす、その苦しみは實に甚しいものである。

人間道

人間道といふものには三つの相がありまして、第一は不淨の相、第二は苦しみの相、第三は無常の相であります。不淨といふは人間の身體が不淨で、五臟六腑皆不淨のものであるとせられるのであります。人間の身體は画きたる瓶に糞穢を盛りたるが如しと言はれるのであります。苦しみといふはこの身始めて生れしよりこのかた常に苦惱を受るのであります。それにいろ／＼の病氣が起りて内苦を生じ、又寒熱に侵され、害蟲に刺され、又は動物のためには傷けられるやうな外苦もありまして、いろ／＼の苦惱にみちて居るものであります。無常といふは人の命はしばらくも止らず、水の流よりもすみやかであります。今日はながらへたりとて明日の命は保ちがたきものであります。實に無常の殺鬼は誰人をも撰ばず、この身は朝顔の露の如くに脆いものであると言ふのであります。

天上道

天上道といふのは欲界と、色界と、無色界とであります。それをくはしく説明することは略しますが、その中の忉利天のことを説明してその例と致しませう。この忉利天に居るところの天人のありさまは、すべてのことが心に

かなひて楽しみは限がないのでありますが、命の終りになると五衰のくるしみが起るのであります。すなはち一には花鬘が忽ちにしぼむ、二には天の羽衣も塵垢にけがれる、三には腋の下より汗が出る、四には眼しぼ／＼めまひを起し、五には本のすみかに樂まず、これを五衰といふのであります。かういふ次第で天上道から離れる苦しきは地獄の衆苦よりも甚しいのであると言はれて居るのであります。

六道の存否

かやうに「往生要集」に説かれてあるやうな六道といふものが、この世界の外に實際に存するものであるか否かといふことは、多くの人々の間に、常に問題となるのであります。この世界の外に六道といふものが何處かに存して、我々が死して後にそれへ行くのであるとするのは、古昔の人々の信じたところでありました。しかしながら、さういふ風に信ずるといふことは宗教的には意味の尠いものであります。ただ地獄や餓鬼のことを聞いて恐怖の心を起す位が關の山でありませう。しかし、「往生要集」に書いてある六道の説はまことに美妙なる文章でありまして、宗教的文藝の作品としてまことに立派なものであらうと思はれるのであります。しかしながら、かやうな六道が實際に存して居るといふことを信ずることは、まことに馬鹿げたことであります。今日のやうな科學

的思考に慣れて居る人々には到底此の如き六道がこの世の外に存在することを信ずることは出來ないことでありませう。

勸善懲惡

そこで、かやうな地獄、餓鬼などの説は、畢竟、勸善懲惡のために假説せられたもので、方便のものであるといふ人もありまして、むかしからかういふ説は行はれて居つたのであります。しかしながら、それを勸善懲惡のための方便の説と見るときはます／＼宗教的の意味の尠いものになつて仕舞ふのであります。これは全く六道といふものを客觀のものとしてこれを我が心の外にながめるためでありまして、さういふ風に見ては、六道といふものも架空の妄談に過ぎぬものであります。

理想なき生活

六道の説は、これを我が心の上につし見て、深く内觀するとき、始めて重大の宗教的意味を含むて居るものであります。單純に見るときは勿論ひとつの物語であります。しかしながら、この物語の中には實に重大なる宗教的の意味を含むて居るのであります。元來、我々人間といふものは

盲滅法界に生きて行かうとするものであります。これは生れつきの衝動若しくは本能といはれるものでありますから、その衝動又は本能のはたらきが本となりて、身體のはたらきがあらはれてその衝動を満足するやうになるのであります。口は口、目は目で、耳は耳、鼻は鼻でそれ／＼満足するやうに、食ひたいものを食ひ、見たいものを見、聞きたいものを聞き、嗅ぎたいものを嗅ぎ、すべてその官能が満足するやうに生活をして行くのであります。それ故に泣いて見たり、笑つて見たり、或は喜んで見たり、腹を立てて見たりして、狂亂なる生活をして居るのであります。これを少し反省して考へるとき六道輪廻の説は認められることでありませう。何等の理想といふものを持たず、何等の統一といふものをしてゐない所謂醉生夢死の生活の相を指して六道輪廻といふのであると思ふときは、それは單純なる物語ではありません。何等の反省もなく、食ひたい時に食ひ、遊び度い時に遊び、寝たい時に寝る、さうしてただ我儘の振舞のみを常とする生活の相はまことに地獄、餓鬼、畜生の相であります。

三惡道と三善道

六道の中にて天上道と人間道と修羅道のこの三つのものは三善道といはれて居るのであります。

地獄道、餓鬼道、畜生道の三つのもは三惡道と言はれて居るのであります。さうして天上道、人間道、修羅道の三善道は結局、我々の欲望の満された場合をいふのでありませう。天上道は萬づの樂しみのあるところで、我々の希望といふものが満足せられるのであります。人間道は我々の希望が満足せられるやうにつとめて居るところであります。たとへば金が無くなれば人に貰ふ、貰はなければ人を騙して取る、若しくは金を持つたるものを殺してでも取るのであります。すなはち我慢我見が主に現はれるところが人間道でありませう。人間道でも天上道でも我慢といふ心のはたらきと、我見といふ心のはたらきと、自分が一番何でもよい、自分が考へたことは一番よいといふ考へを持つて生活をして行く、そこで欲望が満足せられねば承知が出来ぬといふのでありませう。天上道は自から喜びに満つるところであります。人間道はさうではありませぬ。自分が何かしようと思つても他の人が邪魔をすることがある。そこで喧嘩をする、鬭争をする。すなはち修羅道であらはずであります。三惡道の畜生道、餓鬼道、地獄道は欲望が全く碍げられて居る場合でありませう。地獄でも餓鬼でもどうすることも出来ない、どうすることも出来ないで、欲望が碍げられて仕方のないところでありませうから、かういふところではたらい居る心持といふものは所謂愚痴と我愛であります。そこで弱いものが虐められ、強いものが亂暴する、我々の世界にはさういふもの

が満ち／＼て居るのでありまして、なるたけ弱いものを虐め、小さいものを苦しめて自分だけいいことをしようといふのでありますから、まさに畜生道に住んで居ると考へねばなりません。餓鬼道はもう永遠に満されることのない欲望をあらはして居るのであります。どうしても到底満されるものでないことにつきて満足を得むことを求める我々の苦しみの哀れさ加減が餓鬼道といふことによりて示されて居るのであります。

人間の相

かういふ風に考へますと、六道を輪廻するといふことは、結局自分の心の中の相を寫したものであります。人生五、六十年の間に現はれるところの事實として見なくてはならぬことでもあります。人間がこの世にありて我見と我執とによりて生活をして居るといふことが地獄道から畜生道、餓鬼道、修羅道、人間道、天道、それから又地獄道とぐる／＼廻つて居るのであります。かう考へるとき、六道輪廻といふことは我々に取りてはまことに重大の意味のあるものでありませう。

罪惡深重

罪惡深重の凡夫とか、罪惡生死の凡夫とかといふやうな言葉は、かやうな内省の上で言はれるもので、到底この六道の苦しみから出て離れることは出来ぬと考へる心持を表現したものであります。それ故に、曠劫の昔から常に没し、常に流轉して、出離の縁がないものであると悲歎せねばならぬのであります。源信僧都も亦『梵天の離欲の樂しみをうくといへども却て無間の熾燃の苦に落ちぬ、天宮に居て身より光明を放つといへども、後には黒闇地獄の中に入る、いはゆる黒繩地獄・等活地獄は焼割刺刺たへまなきなり、此等の八つの地獄は常にさかむにもゆるること、皆これ衆生の惡業の報ひなり、そのくるしみのありさまを、若くは畫にかき、言にきき、あるひは書をよみてこれを知り思ひやるさへ忍びがたし、いはんや又己れが身にふれんをや』と言つて居られるのであります。これを一場の物語として聞くと、まことに忍び難く恐ろしきものでありますが、これを己れが身に觸れて考へるとき、それはまことに罪惡深重の自身の相として自分ながらみぶるいするほどであります。

惡業煩惱

此の如き説明は固より理論的のものであります。言はば我々人間の心のはたらきにつきての説明

に過ぎぬものであります。我々が實際に宗教のことに志す上に於て、大切なことはさういふやうなことを考へたり、詮索することよりも、現前の我の一念を明かにすることでありませう。現前一念の如實の相は今現にどうであるかといふ、自身の心の相を見ることが肝要であります。佛教で悪業煩惱といふ言葉が屢々使はれて居りますが、その悪業煩惱といふ言葉は明かに現前一念の如實の相を示すものであります。煩惱といふことは煩はしいといふことであります。惱は悩むといふことであります。我々の心の有様が煩はしくして、それによりて悩むのでありますから、それを煩惱と申すのであります。そこでかやうに、文字の意味から申せば我々の心を悩ますもの、我々の心を煩はすもの、我々の心を騒がすもの、我々の心を亂すものであるから煩惱といはれるのであります。それは、今現にはたらいて居る自分の心の相であります。佛教の學問の方では種々の學者がこの煩惱のことにつきて研究をして居られるのであります。それは煩惱といふ事柄の學問であつて、今私がお話をしようとするのは煩惱の學問ではなくして、煩惱といふ言葉で言ひ現はされて居るところの我々の今の一念の相につきてお話を致すのでありますから、煩惱といふ一の事柄を外に見てそれを學問的に研究したことを申すのではありませぬ。實際に今、現にはたらいて居るところの心の内容であります。

根本煩惱

法相宗の良遍上人が片假名で書かれた書物の中に煩惱のことが説明してありますが、それによると『煩惱、是ニ六アリ、委シク開ケバ十アリ、此十ハ有情ノ身心ヲ煩ハシ惱スガ故ニ煩惱ト名ヅク』とあります。煩惱といふものには六つありて、それは衆生の身心を煩はし悩ますものであると説かれてありますが、この六つは根本煩惱と言はれ、つまり煩惱の本であるといふ意味であります。その六つはそれを開けば十になるといふのは、第六番目の煩惱を更に五つに分けますから、合せて十になるのでありますが、その六つの煩惱を根本煩惱と名づけて煩惱の本とするのであります。貪・瞋・愚痴のことは前に已に申しましたが、ここに又再びお話を致すのであります。

貪 その六つの根本煩惱といふものにつきて一々説明がしてあります。『一ニ貪ト云ハ萬ノ物ヲ貪ボリ、有ルガ上ニモホシク拙キ心ナリ』とあります。根本煩惱の第一番目に『貪欲』が擧げてありますが、我々の現實の心の相として第一に著しきものは貪りの心であります。總てのものが欲しい。あればそれでよさうなものでありますけれども、あるが上にもなほ欲しい。又あればあるものをなくすまいと焦る、拙き心なりとあります。

瞋 それから『二ニ瞋ハ我ニ背クコトアレバ善事ニテモ必ズ怒ル心ナリ』とあります。これは自分を擴げやうと

する心が抑へ付けられるためにあらはれる心で、腹を立てることあります。自分が擴がれば善いのでありますけれども、それが思ふやうに擴がらないために腹を立てるのであります。たとへば人が何か言ふ、それが善いことであつても氣に入らねば腹を立てる。忠言耳に逆ふといふことは昔から言はれたことありますが、その通ほりに、自分の氣に入らぬことでありますから、腹を立てるのであります。詔ふて自分の氣に入ることと言はれば喜ぶけれども、眞實の事を言はれると快く思はれることはありません。まことに淺ましい心であります。

慢 根本煩惱の第三は『三ニ慢ト云ハ我身ヲ恃ンデ人ヲ慢リ少シモ謙リ下ルコトナキ心ナリ』であります。世の中に自分ほど賢いものはないと思ふ心が強くして、すこしも人にへり下るといふことがないのであります。自分の智慧をたのみ、自分の力を強く信じて、他の人を馬鹿にするのであります。謙虚の心といふものが無くして、動もすれば、人の事をさばき、自分をばヒイキするのであります。たとひ口の上では『私のやうなつまらぬもの』と言つても、それが高慢の心から出る言葉でありますから、これを卑下慢といふのであります。『私のやうなつまらぬもの』といひながら、それはどこまでも自分をたのむので、かく卑下することがすなはち傲慢に外ならぬのであります。

無明 それから『四ニ無明ヲバ又ハ癡ト名ヅク。萬ノ事物ノ理ニ闇キ心ナリ』とあります。根本煩惱の第四は無明といふのでありますが、それは明りのないといふ意味であります。すなはち智慧のないといふほどの意味で、これを癡(愚癡)ともいふのであります。一切の事物の道理がわからないと説明してある通ほりに、一切の道理にくひないのであります。

疑 物の道理が判らないから、従つて何事も疑はなければならぬのであります。兎角に物を疑ふとありますとほりに、我々はどんな場合でもものを疑ふのでありますが、疑ふといふのは結局左右のはからひをすること、親鸞聖人が言はれるやうに、『如來の御恩をば沙汰せずして我も人もよしあしをのみ申し合ふ』のであります。

不正見 根本煩惱の第六は不正見であります。『正しく見ず』と書いてあるとほりに、我々の考が正しくないのであります。悪いことをばよいことと考へて、眞實の道理がわからないのであります。悪見といふのも同じことであると記されて居ります。不正見といふことも悪見といふことも同じことで、善くない、正しくない考であります。

五見 六つの根本煩惱の中の第六の不正見をば更に分けて五つにするのであります。その第一は薩迦耶見といふので、これは印度の言葉で、翻譯して言へば、我見或は身見であります。我見といふのは自分といふものを考へるのであります。それは畢竟自分の身體を本として考へる不正見でありますから、身見ともいはれるのであります。元來自分といふ獨立のものはない筈でありますけれども、獨立しては居ない筈の自分といふものをちやんとあるものの如くに考へて、そしてそれに執著することが深く、我身と人の身を區別する、それから我物と人の物を區別する、従つてその考が正しくないやうになります。

邊執見 邊執見といふのは不正見の第二のもので、自分の身體と命とは何時までもあるものの如くに考へたり、或は身體が死んだら命もなくなつてしまふものの如くに考へるのは邊執見といふのであります。我身は何時でもあるやうに思ふのは有の見であり、それから我死ん後は永く失せるもののやうに思ふのは無の見といふのであります。それはどちらも人間の考へでありまして、正しい考へではありません。

邪見 不正見の第三は邪見であります。邪見といふのは因果の道理を無視する考へであります。因果撥無の見ともいひまして、『罪トイフ事モナシ、功德トイフ事モナシ、地獄・餓鬼・畜生ノ果報モナシ、人間・天上・淨土・菩提ノ果報モナシト思フ心ナリ』と説明してありますとほりに、佛法で説かるところの因果の法則を無視する考へといふのであります。

見取見 見取見といふのは人の考へたことを採用してそれを自分の考へとするのであります。他の人の見を取る見といふ意味で見取見といふのであります。人が間違つたことを言ふ、それを正しいものと考へてそれに隨順する心持をいふのであります。

戒禁取見 第五は戒禁取見といふのであります。戒禁といふのは戒律のことでありまして、その戒律を善いものとして取る考へが戒禁取見であります。婆羅門の教を奉ずる人が苦行をしなければ悟を開くことが出来ないと言つて自分の髪を抜いたり、自分の身體に火を付いたりするやうな苦しみの行をすることを禁戒といふので、それを善いものと考えてそのとほりやつて行かうとする。この戒禁取見といふものは、まさに不正見であります。

十 煩惱

前に申したやうに根本の煩惱に貪・瞋・癡・疑・慢・不正見の六つある中に、その不正見を開きて身見・邊執見・邪見・見取見・戒禁取見の五つにするので、それを併せて十煩惱になるのであります。この外にも、煩惱はいろいろに數へ上げられて居りますが、これは現在、我々が皆持つて居るところの心持であります。それを十に別けて説明したのでありまして、別に煩惱といふものが存在して居るのではありませぬ。銘々の心が現にはたらいて居るところを見てそれに煩惱と名付けたのであります。さうして、この煩惱といふものは現在の我々の心の相を言ふのでありますから、若しそれを斷つといふならば取も直さず我々の心を無くせねばならぬことでもあります。しかし實際、我々の心に煩惱といふものが存在して居るのではなく、我々の心の全體がすなはち煩惱であります。貪る心、腹立つ心、人を侮る心、疑ふ心、愚痴の心、正しくない考へ、かういふことは現在今はたらいて居る自分の心の相の全體を示したものであります。

隨 煩惱

佛敎の書物には、六煩惱、十煩惱の外に又、隨煩惱といふものが擧げてあります。隨煩惱といふことは根本の煩惱に従ふてあらはれるといふ意味であります。結局、今まで申したのを更に細まかに別けただけのことでありますが、昔から隨煩惱といふものが説かれて居るのでありますから、序にこれを申し上げて置きます。

忿 隨煩惱は二十ほごあります。良遍上人の書かれたものに據りて一々これを擧げてお話致しませうと思ひますが、その第一は忿であります。これは現前に見聞することにつきて腹を立てるので、何か氣に入らぬときは口やかましくのしり、甚しきは手を出して相手をなぐるのであります。怒るといふのと同じことでもあります。

恨 第二は恨であります。忿の起つたとき、それを心の内にたくはへて外へ出さず、むし／＼する心であります。

惱 第三は惱で、人を恨むによりて心の内が常に穩かでないのであります。従つてその言葉があらく、行がいやしく、腹黒く毒々しいのであります。

覆 第四は覆であります。自分がした悪いことを人に知らせまいと思つてこれをかくすのを覆といふのであります。若し悪いことをしたら、悪いことをしたと懺悔すればよいのに、それを

ごうかして、人に知らせないやうにとかくさむとするのであります。

誑 これはたぶらかすのであります。自分の都合のいいやうに人をだます。『誑トイフハ名利ヲ得ムガタメニ、心ニ異ナル謀ヲ回ラシテ矯シク徳アリト現ハス、僞ノ心ナリ、世ノ中ニ誑惑者トイフハ此心ノ増セル人ナリ』とあります。

諂 第六に『諂トイフハ人ヲ瞞マシ迷サンガタメニ、時ニ隨ヒ、事ニ觸レテ奸シク方便ヲメグラシ、人ノ心ヲ取り、或ハ我過ヲカクス心ナリ、世ノ中ニ諂曲ノモノトイフハ此心増セル人ナリ』心になきことを曲げて人を取りこまむと巧言令色をする心であります。

憍 自分の才能名勢などに深く執著して高ぶるもので、俗にいふうぬぼれであります。前の六煩惱の慢は他の人に對して高ぶるので、俗にいふう高慢であります。

害 人に對して情のない心を害といふのであります。

嫉 『九ニ嫉トイフハ我身ノ名利ヲ求ムルガ故ニ人ノ榮ヘタルヲ見聞シテ深クネタマシキコトニ思ヒテ喜バザル心ナリ』。人のおちぶれたるを見てはそれに同情することは出来ませけれども、人の榮へたるを見ては嫉ましいといふ心が起るのが常であります。

慳 金錢財寶など澤山集めてしまつてそれを人にやるまいとする心持、益々それを貯へて行かう

とする心持、それが慳であります。

無慚 自からの心に耻ぢて罪をつくることをせぬやうにするのが慚の心であるのに、それに反して自己の本分を顧みて耻することなく、尊奉すべき聖教に照して耻づる心なく、賢人善法を輕蔑する心であります。

無愧 前の無慚といふのは、自分に對して耻づることのないのでありますが、この無愧といふのは、世間に對して耻づることのないものであります。それを併せて無慚無愧といふのであります。厚顏無耻といふのはこの類であります。

不信 信じなければならぬことを信じないで、さうしてそれがためにその心が澄まず、清くならぬために懈怠の心のみが起るのであります。

懈怠 『懈怠ハ諸ノ善事ノ中ニ懈リ懶キ心ナリ、カカル人ハ又多ク不信ナリ』とありますが、善き事の中に居りて懈怠してよい事をしないで、唯ぐずぐずして居るのであります。

放逸 すべて自分の心を守ることをしないで、締りのない心持を放逸といふのであります。

惛沈 何となく心の沈みてくらく重く、堪忍する心のなきをいふのであります。

掉舉 兎角心が浮動して落ちつかぬ、物に移りやすきをいふのであります。

失念 『失念トイフハ取りハズシ物ヲ忘ルル心ナリ、斯ル人ハ多ク散亂ナリ』。善いことを忘却することをいふのであります。

不正知 物を邪曲に解することで、それによりて戒を犯すのであります。

心亂 心が所縁の境の上に一定せず、常に散亂するので、意馬心猿と言はれるのはこの心の有様であります。前の掉舉は一とつの事に對してその心が騒しいのでありますが、心亂は數多の事に於て彼此と心が移りて丁度水に画ける畫のやうなもので、とりとめもなく亂れるのであります。

繫 縛

煩惱といふものをかやうに區別することは佛教にありて古くから行はれることでありますが、要するに、それは屢々前にも申したやうに全く自分の心の相に外ならぬものであります。さうして、さういふ我々の心のはたらきを考へて見ると、如何にも煩はしいものであります。又一面から言へば、かやうな煩惱は自分を縛るものであります。我々はこの煩惱の心に縛られてどうすることも出来ぬのであります。そこで煩惱のことを別に繫縛とも名づけるのであります。畢竟するに、これは我々の智慧のはたらきによりてすべてのものに善惡・美醜・正邪の價值をつけるやうになればご

うしても我々の現在の心の相を考へてこれを煩惱と言はねばならぬのであります。別に煩惱といふものが存在して、それが我々の心の中にあらはれて来るのではありませぬ。

一〇六

悪業

更に、これを道德の心の上から考へれば悪業といふべきであります。罪惡といふも同じことでもあります。佛教の書物には悪業煩惱といふ言葉がしばしば使はれて居るのであります。罪惡深重といふ言葉もしばしば用ひられて居ります。又煩惱具足といふ言葉も常に用ひられて居ります。煩惱具足といふのは煩惱が餘るだけあるといふ意味であります。

愚惡

我々の心は煩惱にみちて居るといふときは、煩惱といふものが別にあるやうに聞こえて、その煩惱を除きさへすれば後に煩惱でないものが残るやうに考へられます。これは全く煩惱といふものを客觀に見て居るのであります。私が今、煩惱といふものを説明するのは、それが現前の自分の相であるといふのであります。煩惱とか繫縛とか罪惡とか、いろいろの名稱をつけることが出来るの

であります。要するに愚惡の二字に歸着するのであります。さうして、この愚惡が全く現在の自分の相に外ならぬものであります。そこで、その愚惡の相を如何に見るかといふ實際の事項が問題になるのであります。

感覺に弄ばる

釋尊が或る日弟子を前に置いて言はれたのに、『愚痴の凡夫でも苦しみといふことと、楽しみといふことと、苦しまず、楽しまないといふこととの三つの心がはたらいて居るが、道に志すものでも矢張苦しむといふことと、楽しむといふことと、さうして苦しまず、楽しまないといふ三つの心がある』と、かういふ話をせられたところが、『それでは普通の凡夫と、悟を開くところの菩薩とどう違ひますか』と弟子が質問したところが、釋尊が言はれるのに『お前等にはわからぬだらうから、その差別を言つて聞かさう。凡そ人間の身體に感覺のはたらきがある間は苦しみといふものは誰にでも起る、そこで腹を立てることもあり、或は悲しむこともあり、或は笑ふこともあり、或は喜ぶこともあり、つまりその感覺のために弄ばるのである。偉い人でも苦しみの起る時には苦しみが起る、楽しみの起る時には楽しみが起る。けれども、苦しみとか、楽しみが起きて来るその感覺に

一〇七

弄ばれるといふことが無いから、悟を開くところの菩薩は凡夫と違つて居る。』と言はれたといふことでもあります。これは煩惱といはれるものが起るのは生きたる人間の心のはたらきであるから、如何なる人にも同じやうに起るものであると説かれたのでありますが、まことに我々は煩惱をば自分の心の相と知るとき、それは如何ともすべからざるものであるといふことを知らねばなりません。凡夫であるから煩惱があり、佛道に志せば煩惱がなくなるものであるといふやうなことを考へてはなりません。

煩惱そのまま

そこで實際、我々に取りて、問題とすべきは、煩惱はそのままとして、その煩惱に動かされないやうに自己を調へて行くことでもあります。煩惱が、自分の心の全體であると知るときには、その煩惱を如何ともすることの出来ないことは明かであるに、ごうにかして、その煩惱から離れなければならぬとて努力するのは、全く自分といふものと煩惱といふものを別に離してしまつて、さうして煩惱といふものを眺めて居るのであります。言葉を代へて言へば煩惱といふものを抽象してそれにつきて考へて居るのであります。今私の申すのはさういふ我々の思考でなく、現前の心の相として

煩惱を見るのでありますから、それはどうすることも出来るものでないといふことが徹底してわかるべき筈であります。この場合に起きて来るのが宗教といふ特別の心のはたらきであります。その心持は言ふまでもなく安心立命の心でありまして、それによりて、煩惱そのまま、苦しみから離れるところの道が開けて来るのであります。苦しみから離れるところの道が開けて来るといひましても、煩惱の外に新しい道がある譯でなく、煩惱そのものの中にそれから離れる道があるのであります。さうしてその新しい道は自然法爾に開けて来るのでありますから我々はただその不思議を仰ぐのみであります。それ故に我々としてなすべきことはその煩惱具足の相を内観するより外には致方もないことでもあります。

徳果罪報

釋尊はある時人に向ひて、『すべてのものは死に行く、それは皆死を以てこの世の終りとするからである、さうして、その業に従ふて功德の果と罪惡の報とを受ける。悪しきことをなせる人は地獄へ、徳を積める人は天界へ赴むくものである、されば善きことをなして後の世にそなへよ』といふ意味のことを説かれたことがあります。かやうに釋尊が功德には善い果があり、罪惡には悪い報が

あるといふことが因果の法則であるから、善い果を得やうとするならば功德をつむやうにせよ、悪い報を嫌ふならばこの世にありて悪いことをしないやうにせよと言はれるのは全く内観を主として、放逸を戒められたのであることを知らねばなりません。釋尊が同じ祇園精舎に居られたとき、ある日、お弟子に對して『比丘等よ、私の教が他の教に勝れた點が二つある、第一には私は人々が惡をなすときに、まごもに惡を見つめよと教へる、第二にはそれからその惡を厭ひ離れよと教へる、これが私の教が勝れたる點である』と話されたのであります。これによりても内観が大切であるといふことは明かに示されて居るのであります。

三 天 使

それから、釋尊はある晩、お弟子達をあつめて話をせられましたときに、この世には三人の天使がつかわされて來るといふことを話されました。釋尊はいつでもかういふやうに卑近の話をして聞くものをして、よく理解せしめるやうにつとめられました。その話は次のやうでありました。

或人がこの世で悪いことをして地獄へ墮ちました。さうすると獄卒が荒々しくこの人の手を捉へて閻魔王の前へ引き出して申すに『閻魔王よ、この男は人間界にありて父母をないがしろにし、師長を敬はない罪で、ここ

へ遣つてまゐりました、なにとぞ適當の罰を加へて下さい』と申しました。その時閻魔はその人に向つて『汝は人間界にありて第一の天使を見たことはないか』と問ひました。その人は『天使を見たことはありません』と答へました。『それならば、汝は年が老いて腰が曲がり杖にすがつてよぼ／＼と歩いて居る人を見たことはないか』『さういふ老人ならばいくらも見ることがあります』。『しからば、汝はそれを見ながら、人間は老衰するものである。私ももとより老衰を免れぬ、急いで善い事をしやうとは思はなかつたか』『大王よ、私はそこへ氣がつきませぬでした、まことに放逸でありました。』そこで閻魔王はその人に向つて『汝は放逸のために見るべきものを見て居りながら、なすべきことを怠つた。汝はその放逸の罪の報を受けねばならぬ、それは汝の父母がしたことでもなければ、汝の兄弟がしたことでもない、又朋友や他の人々のしたことでもない、汝自身がしたことであるから、汝がその報を受けるのである』と言ひました。

それから閻魔王は又、その人に向つて『汝は第二の天使を見たことはないか』と問ひました。その人は『天使を見たことはありません』と答へました。そこで閻魔王は『それならば汝は病氣にかかつてひとりて寝起きが出來ず、自分の汚れたものの中につかつて居るものを見たことはないか』と聞きました。その人はそれに對して『さういふ病人はいくらも見ました』といひました。そこで閻魔王は『汝はさういふ病人を見ながら、自分も病氣にかかるものである、達者の中に身口意の三業を淨めやうとは思はなかつたか』といひました。その人は『大王よ、私はあまりに放逸でありました。』

それから又、閻魔王はその人に向つて『汝は第三の天使を見たことはないか』と問ひました。その人は『天使を見たことはありません』と答へました。『それならば、汝は死人の一日二日三日と過ぎて、身體が脹れ、膿が流れ出るやうになつたのを見たことはないか』『さういふ死人ならばいくらも見ることがあります』『汝はそれを見なからどうしてさう放逸であつたのであるか、汝は今、その放逸の報を受けねばならぬ。それは汝の父母がしたことでもなければ兄弟や朋友や、その他の人がしたことはない、汝自身のことであるから汝自身がその報を受けねばならぬ』と言ひ了りて、獄卒に命じてその人を引き立てて、燃えたつ竈の火の中に投げ入れさせたのであります。

釋尊はこの話をお弟子達にして、さうして『比丘等よ、これが此世に使はさるる三人の天使である、この天使に呼び醒まされて放逸を離るる人は幸であり、天使を見ながらなほ醒めぬものは、長夜を悲しまねばならぬ』と教へられたのであります。釋尊が常にお弟子達に向つて言はれた言に『心を守つて居らねば身・口・意の三業を守ることが出来ぬ、身・口・意の三業を守ることが出来ねば三業は欲のために汚される、三業が汚れるときはその人の死後は決して幸福である筈がない』とあるのも、全く同じ意味で、要するところは、自身の心を内觀して、まごもにその心の惡いところを見なければならぬといふことを説かれたのであります。自分といふものを、まごもに見るや

うにと、三人の天使が眼の前にあらはれるのであるのに、それに氣がつかぬために我々は冥から冥に入るのであります。物質的に貧弱なる生活をして居りましても、精神的の生活を美しくして冥より明に入ることが期待すべきであるのに、我々は内觀の足らぬといふところに氣をつけねばならぬのであります。

五 惡

まことに釋尊が言はれるやうに、天使は常に我々の眼前にありて、我々に警告を與へるのでありますから、我々はそれを見て自身といふものを反省せねばならぬのであります。釋尊が又、五惡といふものを擧げて説いて居られることが「大無量壽經」に載つて居りますが、これは我々の平生の行爲が仁義禮智信の五常に背いて居るといふことを指摘されたのであります。畢竟するに、世の人々がこの五惡をつつしまぬが故に生々世々流轉輪廻の止むことがないといふことを説かれたのであります。ここに五惡として擧げられたるものは、これを要するに道德に背くところの行爲に外ならぬものであります。長い文章でありますけれども、なるべくその原文によりまして、その大體の意味をここにお話致しませうと思ひます。

その一。の悪といふは諸天人民から蟲けらの類に至るまで、皆互に悪をなさうとして居る。強きものは弱いものをたほし、互に残害し、殺戮し、又互に吞噬して善をなすことを知らず、悪逆無道である。それがために自然の理によりて犯すものは決して赦されず、後には必ず殃罰を受ける。さればこそ、世に貧窮下賤のもの、孤獨、聾啞、愚者、狂者があり、又尊貴、豪富、高才明達のものがある、これは皆宿世の業の報である。世間には常の道として牢獄があるけれどもそれを畏れて慎しむことをせず、悪をなして罪に入りてその殃罰を受けて、それを脱がれようと思ふても免れることが出来ない。これは現に目の前に見られることである。まして命壽終りて後に、その報は最も劇しく、幽冥に入り、生を轉じて身を受け、丁度國の法によりて刑罰を受けると同じやうに、或は地獄に生れ、餓鬼となり、畜生の生を受け、限りなき苦しみに沈む、その壽命は或は長く、或は短かく、魂神は自然にひとりその定め處に趣くのである、生ずるときは獨りであるが宿生に於て怨となりしものが必ず一處に生れて互に怨を報じて悪報の盡きざる間は決して離ることが出来ず、その中に展開して出づる期はない、その痛苦は言ふことが出来ぬ。かやうに因果の理といふものは自然に天地の間にあるもので、急にその報が来なくともいつかは必ず来るのである。これを一。の悪といふのである。この第一の悪といはれるものは仁の道に背きたることをいふので、普ねく物を愛憐するの徳を修めないことが、一。の悪とせられるのであります。

二。の悪といふは世間の人々は父子、兄弟、夫婦、親族等すべて義理なく、法度に順せず、奢侈に耽り、淫佚にして己を高ぶり恣まなる行をなし、皆その心のままに快樂を得むことを願ひ、互に相欺き、心と口と各異にして、言念に實がなく、佞諂不忠にして、言葉巧に媚びへつらひ、賢を嫉み、善を謗して、人を枉の罪に陥れる、主上は明かならずして臣下を用ひ、臣下は國政を自由に不義をなし、種々の機關を以て偽りを構へる、たとひ忠良の臣が國の法度を踏み行ひ時の形勢を知りて忠義を盡さむとしても闇君であるために不良の臣に欺かれて忠良の臣が損害せられる。臣はその君を欺き、子はその父を欺き、兄弟夫婦朋友かはるく相欺き、おの／＼貪欲瞋恚愚癡を懷きてただ我身のためのみ思ふことは貴賤上下皆同じやうである。欲貪のあまりみだりに物を食ほりて家を破り身を亡ぼし、祖先も子孫も顧みず遂に内外の親屬までにその罪を及ぼすのである。あるときは多人数集まりて相共に不義をはたらき互に己れに利を得て人に害を與へむとするために遂には怨を結ぶに至る。財寶を蓄積すれども吝しみて人にこれを與へず、財寶を愛護し、貪心が深きによりて心身を苦勞する。それ故に命の終るときに至りて怙みにするものがなく、獨りこの世に來りて獨りこの世を去り、一も隨ふものがない。かやうにして、善惡の業力によりて次第に禍福を生じ、或は樂處にあり、或は苦毒に入る、そのときに及びて悔ゆるとも已に及ぶものでない。世間の人々は無智にして善を見ては誇り、惡を爲さむとして妄りに非法を行ふのであ

る。さうして常に盗心を懐き、勞せずして他人の利益を我物にせむと望む、僥倖にしてその利を得ることがありても悖りて入るものは悖りて出づるものであるから忽ちにして消盡する、そこで亦これを求むるのである。義に背く悪人は我身の不正なるが故に人がその悪を知れば顔色がかはるのであるが、ひたすらにそれを畏れるのみである。遠き慮なくして事の起りてから後に悔ゆる。かやうにしてこの世にありては國の掟に従ふて罪の報を牢獄に受ける。しかも宿世の因縁によりて、道を信ぜず、善を修めなかつた罪のために今また惡を造りて後の世に惡道に入り、三途の無量の苦しみに沈み、その中に展轉して劫を重ねても脱れることが出来ぬ。これを二の惡とするのである。この第二の惡といふは義に反むくことで、宜しきに從ふて己れが分限を守ることがせず、物の條理を紊亂することをいふのであります。

三の惡

三の惡といふのは世の人々は相因りて共に天地の間に生活して居るのであるが、その壽命はいくばくもない。上に賢明、長者、尊貴、豪富のものが居り、下に貧窮、下賤、註劣、愚夫が居るのである。その中に不善の人がありて常に邪惡を懐き、たゞ姪佚を念ひ、苦悶は胸の中に充ち、愛欲に心亂れて起居も安らかならず、有るものは惜しみて與へず、もつとく得たいと望む。美しい女にながしめをつかひ、あやしい氣配を外にあらはし、己れが妻を厭ひて私かに他の女の家に入りびたりて財を費し、なすことは皆法に背くのである。或は不良のものは

一處に集まりて兵力を用ひて攻め、刃を以て却かして遂には人を殺して物を奪ひ取る。偷盜の惡業をなさむがために、他の物に心をかけ、自己の職業を修めず、僅なる物を盗むことから漸次に欲にからまりて大なる盜をはたらくやうになる。始めは物を盗むに恐氣を生じ熱を覺へるのであるが、後には他を脅かして妻子を養ふに至り、心のままに身の樂みに耽り、或は親族のものに向ひても上下を撰ばないやうになる。家族も知人もこれを憂ひ苦しむのであるが、かやうのものは國の法律をも恐れることはない。かうしてその惡はあらゆる人々に認められ、日月に照され、自然の理に順ふて惡道に沈み、限なき苦しみを受け、却を重ねてもこれを免れることは出来ぬ。これを三の惡といふのである。この第三の惡とせられるものは禮のないことをいふので、禮とは仁義の道を行ふにつきて節度ありてそれを行ひあらはすもので、要するに無禮とは我身を謙だり尊貴の人を敬ふことをせざるのをいふのであります。

四の惡

四の惡といふのは世間の人々が善を修めむと念はず、轉た相教へて共に衆惡をなさしめることをいふ。二枚舌をつかひ、惡口をいひ、虚妄の言を吐き、綺語を使つて互に相鬪亂する。善人を嫉み、賢者を毀りて私かに快しとする。兩親に孝行せず、師長を輕慢し、朋友には信なく、誠實といふものは少しもなく、自分は尊貴のものと考へて自分のなすことは皆道にかなふて居ると信ずる。無暗に威勢をもつて他人を侵して顧みることがない。自

から知ることが出来ずして、悪をなしながら耻づることをなさず、我身の力の強きに任せて人の恭敬せむことを欲し、日月神明の照覽を畏れず、善をなすことを知らざるは感化することが難い。自から徳を行ふことは譬のやうであるにも拘らず、それをば當然のことと思ひて、すこしも憂懼することがなく、常に憍り誇つて居る。かやうな悪人なれども前世の福德の力によりて殃罰を免れることはありても今世に悪を造りて前世の福德が盡くれば諸天善神は離れて依怙するところが無くなる。この命が終れば一生の造悪は悉く我身に歸し、罪業に引かれて惡趣に行くのである。これを四の惡とする。この第四の惡といふは智に背くところの惡であります。明かに善惡邪正を識別して我が行ひが人道に契ふや否やを知ることが出来ぬためにいろ／＼の惡事をなすに至るのであります。

五の惡

五の惡といふのは世間の人々が、懈怠にして善をなさず、又身を修め業務に精勵しやうとせず、それがために一家眷屬が困苦に陥る、父母それを教誨すれば目をいからし口答をなし親子が恰かも怨敵のやうである。人より物を取るにも、人に物を與へるにも節度がなく、多くの人々はそれを患へ厭ふのである。恩を報ずる心もなく、借りたる物を償ふ心もなく、かくして貧困に陥りて重ねて財を得ることが出来ない。自身のみ氣儘に利を得むと計略し、それが甚しくなりて遂には他の物を奪ふに至る。さうして心のままに放蕩し、人の情を知らず、強て人を抑制せむと欲し、人の善あるを見てはこれを憎み、義なく、禮なく、自から顧みることがないから、諫めるこ

とも出来ず、家族を養ふところの資料の有無をも氣にかけず、父母の恩を思はず、師友の義を存せず、心常に惡を念ひ、口常に惡を言ひ、身常に惡を行ふて、かつて一善もない。先聖諸佛の經法を信せず、善をなせば善を得べく、惡をなせば惡を得ることを信せずして眞の人を殺し、道を修める人々の和合を亂し、父母兄弟等の家族さへもこれを害せむとする。それに親屬のものもこれを惡み、死んで呉ればよいと願ふ。かくの如きは世間の人々の心が皆同様で、無智でありながら自から智ありと信じ、生の從來するところ、死の趣向するところを知らず、人に對して仁ならず、親に向つて順ならず、天地の道理に違逆する、しかもその中から僥倖を願ふて長命を求むれども、必ず死に歸せざるを得ぬのである。慈心を以て之を教化し生死輪廻、善惡二趣の相を示してもこれを信ぜず、懇ろに語りてすこしも益がない。壽命が終らむとするときに至りて、過ぎ去りしことを顧みて後悔し、又往く先のことを思ふて懼れても、最早及ぶべきことでない。天地の間には五道は分明にして善惡報應し、禍福相承け、身自からこれを受るので、誰人もそれに代るものはない。善人は善を行して樂より樂に入り、明より明に入る。悪人は惡を行して苦より苦に入り、冥より冥に入る。これは獨り佛のみが知つて居られるのである。教へ導いても信するものが少ないから生死が休まず惡道が絶えないのである。これを五の惡とする。この第五の惡とするものは信に背くところの惡を誡むるのであります。仁義禮智の外に信といふものが人道の上に大切なものでありますから、この信に背くことを五の惡として、かやうに説かれたのであります。

これを要するに五の惡といふものは我々人間の心の有様をそのままに見て、道德上の價值をつけてこ

れを悪とせられたものであります。

悪の厭離

五悪の説明の表面を見て、それがただ不仁、不義、不禮、不智、不信の悪を誡められただけのことであると見るのは、甚だ淺薄の見であると言はねばなりません。固より五悪の説明の文面は、我々の行爲の不良なる點を細かに列擧して、この五悪から離れ、その反對であるところの五善を修めて、この世にても安樂、未來にても安樂を期すべきであると説かれて居るには、相異ありませんけれども、全體、釋尊がかくの如き五悪を説かれたのは淨土に往生することを勧められた後のことではありません。しかも五悪の故に淨土に往生することの出來ぬことをも説いて居られるのでありますから、この五悪の説明は、我々をしてその五悪を厭ひ離れしめやうとせらるるためであります。さうしてこの五悪を厭ひ離れるといふことは、五悪をそのまま眞正面に見ての後に始めて出來ることでありまして、それは道德の心のはたらきを十分ににして、内觀がその深刻の度を窮むるに至つたときに始めて我々はその五悪を厭ひ離れることが出來るのであります。厭ひ離れるといふことはただ五悪を嫌忌してそれを遠ざけやうと努力することをいふのではありませぬ。五悪を内觀して、そ

れを如何ともすることの出來ないといふことに到達したときの心が眞に五悪を厭ひ離れやうとする心であります。言ひかへれば、道德の心のはたらきを十分にあらはして、さうして我々にありて道德の實行が十分に出來ぬといふことを確實に知つたときに、我々は始めて道德を離れて宗教の心のはたらきをあらはすものであるといふことを示されるのであります。

我 想 と 苦

釋尊は、悟りを開かれてから、始めて憍陳如、外四人のものに説教をせられましたときに、第一に人間の世は四苦八苦であると説かれました。四苦と申すのは生・病・老・死であります。八苦は愛するものに別れる苦しみ、いやなものと一緒に居る苦しみ、それから求めて得られない苦しみ、それからこの身體があるために現れて來るところのいろいろの苦しみ、この四つの苦しみを前の生・病・老・死の四つの苦しみに加へて八苦といふのであります。釋尊の教によると、人生といふものは要するに苦しみである。如何なるものも苦しみでないものはないと説かれた後に、これ等の苦しみといふものは皆、我想を以て本とするものである。我想といふものがある故に、いろいろの苦しみが起るのである。それを滅しなければならぬ。さうして、この苦しみを滅するためには八つの正

しい道を修めて、この苦しみの原因を除き、さうして涅槃寂靜の境に行かねばならぬといふことを詳しく説かれたのであります。

無常 苦

元來、我といふものは無常であるのに、その無常である我といふものをば常であると思ふところに苦しみが生ずるのである。一切のものは皆常一主宰のものではないのに、それが常一主宰のものであるやうに考へる。常でないものを常であらしたるのである。そこで我々人間は苦しみを造るものである。かういふやうに無常のために苦しむといふことをくわしく説かれたのであります。

淋 し さ

何人でも命はおいしい、何時までも生きながらへて死にたくないのとありますから、死ぬるといふことを考へると、まことに淋しさの心持に堪へられぬのであります。外のことは無常であつてもよいのであります。我々が一番大切にして居るところの命だけは常である方がよいのであります。そこに大きな矛盾があるのであります。その矛盾が我々には淋しさの心持になつてあらはれるのであ

ります。そこでさういふ無常といふものを離れたといふ心持が直ぐに起るのであります。淋しさの心持から離れてさうして樂な心持にならうとするのであります。しかしながらそれが思ふ通りにならぬために苦しみが起るのであります。人間は固より死なねばならぬけれどもしかしながら死にたくないといふその心持が強いために淋しさを覺へ、そこでいろ／＼と煩悶するのであります。かやうに矛盾をかさねて、心を外の方へとはたらかすものでありますから、それが煩惱を造る業となり、それが又業報苦をあらはすものであります。

生死 解脱

眞に無常といふことの意味が明瞭にわかつたならば、存在といふものは常でないといふことが知られる筈であります。世の中の存在は一切常でないといふことが本當にわかつたならば人間がこの世に生れ出るといふことはただ一時的のものであるといふことが知られる筈であります。ただ一時的にこの世界に寄生して居るのであります。常住不變のものでないといふことは無論であります。何も彼も常がない。さういふ常がないといふことが本當の意味にわかつたならば、我々の命も亦全く一時的のものであります。全く一時的にこの世界に寄生して居るのでありますから、死ぬるとい

ふことは寄生の世界を去つて本國に歸るのであります。それ故に、無常といふことが本當にわかれば生死の苦しみといふものから解脱することが出来るのであります。

彌陀の國

さういふ風に考へて見れば我々は淋しさを感ずる世界から逃れ出るのではなくして、その世界から進むでいくべきであります。善導大師の言葉に『從佛道遙歸自然、自然即是彌陀國。』佛に從つてぶらぶらと自然に歸つて行かう、自然はすなはち彌陀の國である、かういふやうに考へることは實に當然のことであります。我々は何處から來たかわからぬものでありますが、彌陀の國から來たものであると考へられます。そこで佛の言はれるが儘にぶらぶらと自然に歸るのが當然でありませう。この世界といふものは如何にも迷つた世界でありますから、迷はない世界に歸るべきでありませう。それ故に本當に無常といふことが釋尊の言はれたやうな意味で知られたならば、我々はすぐに生死を解脱することが出来るわけであります。ところが、その無常が少し變挺になつて、無常といふとすぐに死ぬることの怖しさを考へ、どうしても死ななければならぬのなら、せめて死んでから後に善い所に行かうとさういふ心持を起して、それはただ煩惱が増すのみであります。それでは決して解脱するわけではないのであります。

苦惱の經驗

前にも申したやうに、我々の自分の相は外界がうつるところの影であるとして、それは我々に取りては苦惱であります。固よりこれを苦惱と感ずることは我々自心のはたきであります。この苦惱が自分の業の報であるといふことまで考へをすることが出来る、その苦惱の經驗といふものは我々をして苦惱する自分の相を見ることが出来るやうにはたらくものであります。自分の心が淺ましいものであり、罪の深いものであり、僞善のものであるといふやうなことは苦惱の經驗によりて、益々深刻に感ぜられる心持であります。そこで釋尊が自分は自分の業の相續をして居ると言はれたことは如何にも深刻に自身の中の心を考へられた結果でなければならぬと思ひます。さうして此の如き苦惱は、「無常」であるものを「有常」としたいがために起るのでありますから、その「有」といふ考へを取つて仕舞へばよいといふことも出来ませうが、しかしながらそれは實際には駄目であります。それは「我」といふ主宰のものを立てて、それが「有」を取つて仕舞ふとすからであります。釋尊が諸行無常を説き諸法無我を説かれるのは「我」といふ想が主宰となりて

すべてのものが常であるといふ考へから苦惱が起るのであるから、その考へを離れなければ涅槃寂靜の境に行くことは出来ぬとせられるのであります。その涅槃寂靜といふのは決して淋しい境ではなくして、靜かなる境であります。

涅槃寂靜

涅槃寂靜は人間の苦惱が無くなつた境地であります。此世よりして言へば彼岸の世界であります。固より我々の身體が無くなつた後に始めて完全に到達せらるべきところでありませぬ。しかし生きて居る時にも到着せらるる筈のものであります。さうして、それは我々が有常の考へを離れてさうしてそこに感ぜらるる淋しさに親しんで行く心持であります。決してその淋しさを離れようとする心持ではありません。それ故に、釋尊が涅槃を説ける時には何時でも有常の否定をして居られるのであります。我々が常であるといふ考へをなすことを否定してそこに涅槃といふ境地に達するところが出来ると言はれるのであります。

愛欲の純化

「有」の否定につきて釋尊が常に説かれたところは愛欲の否定でありました。それは我々が「有常」といふことの考へは愛欲が第一でありまして、常にあらしたいといふ愛欲の心持が強くなるとかめに苦惱が起るからであります。しかしながらその愛欲といふものはこれを全く捨てる事が出来ないものでありますから、捨てることの出来ない愛欲を捨てようとする事は鐵眼禪師の言はれるやうに極めて愚かなことであります。愛欲を取り去れといふのではなく、愛欲の價値を否定するのではありません。愛欲の價値を否定するによりて愛欲の純化が行はれ、煩惱が綺麗になるのであります。死を怖れて淋しさを感ずるところの心持を淋しさに親しむ心に變へるのであります。しかしながらよく考へて見るのに、愛欲を純化するといふことは、愛欲の純化が出来れば世界でなければ駄目なのであります。我々の現在の世界でさういふことは恐らくは出来ないことでありませぬ。愛欲の出来る心持から考へても亦愛欲を起さしむる境遇から考へて見ても、今我々の現在の生活で愛欲から離れるといふことは無論出来ないことでありまして、その愛欲を純化するといふこともまた出来ないことでありませぬ。

理想の境地

愛欲を純化しやうと念願して、それが現實の世界にて成就せられぬといふことを考へるとき、我々は必ず純化の出来る世界を欲求せねばならぬのであります。さうして今申した愛欲の苦惱を深く考へれば考へるほど益々純化の出来る世界を念願することが切實であります。彌陀教といふ教はさういふ意味から起て來るのであります。そこで現實我々はこの世界で無常のために苦しみ、業報のために苦しむ、この人間の苦しみに對して人間の苦しみを離れた安樂の世界を求めるといふところにこの彌陀の教が成り立つて居るのであります。單に無常といふものの淋しさに堪へずして、淋しくない世界を求めようといふやうな貪欲の心持でなくして、現實の人間苦に當面して、理想の境地にあこがれるところに、苦惱が純化せられるのであります。

豫想の所

かくの如き理想の境地は安樂の世界でありますが、それを、何處か善い所だらうと豫想するところに、それはただその人の豫想に過ぎないものでありまして、それは行つて見なければわからぬものでありませう、善い加減に信じて居つてもそれは他人に欺されて居るか、又は自分にだまされて居るに過ぎませぬ。かやうに安樂の世界が實に善い所であるといふことを自分で豫想するか、空想

するか、或は人の言つたことを聞いて妄信するか、何とか彼とか、胡磨化してそれで安心して居るといふことは結局安心ではなくして、せい／＼決心位の程度のものでありまして、それでは逆も宗教といふ安心立命の心持の起るわけではないのであります。

極樂往生

そこで、我々が終極に、完全に、苦惱を純化することの出来るところは、未來の世界にあり、それが極樂世界と名づけられるところであると言はねばなりません。さうして、この極樂世界は我々の理想が向ふて進むところでありますから、極樂世界が明瞭に意識せられることによりて、我々はますますこれにあこがれるべき筈であります。さうしてこれにあこがれるのは我々がますます自分の淺間しいといふことを知るがためでありまして、宗教生活はこれによりてますます向上して行くのであります。元來、自分が愚かであると痛感することは、愚でないことを望むためにあらはれるのであります。又自分が悪いものであるといふことを考へるのは悪くないことを念願するためであります。それ故に理想とするところの境地に向つて行く心が極めて強くあらはれる筈であります。佛教ではこの理想とするところを涅槃と名づけて居りますが、それは理論の上のことであり

ます。宗教の心の上から言へばそれは今ここにいふ極樂世界のこと以外ならぬものであります。

道德超越

かやうに、人生が苦しみだといふのも畢竟するに道德的に内省した結果であります。業報の苦し
みといふことも、無常の苦しきといふことも、すべて道德的内省の結果であります。さうして、
道德的内省からして宗教の心持へと進むのであります。宗教の心持としては全く道德を超越して
居るのであります。道德と宗教はよく似たものでありますけれども、そのはたらきは大變に違ふの
であります。道德といふものは畢竟我々が自分の罪に對して責任を負ふ心持であります。しかしな
がら、道德といふものは、生れたり、病氣になつたり、我々が年を取つたり、死んだりすることに
は責任を負はなくとも善いのであります。ところが宗教はその生・病・老・死に對してまで責任を
負ふのであります。生れるといふことの責任を負ふ、病氣になるといふことも責任を負ふ、年を取
ることも、死ぬることもみな責任を負ふのであります。その責任を解決するところにこの現實の
世界を離れて安樂の世界まで進まなければならぬのであります。

我の問題

それに宗教と道德との相違する點は「我」の問題につきての考であります。殊に釋尊の所説はこ
の點につきて重要なものでありますから、そのことを少しくお話致しませう。我邦の言葉でたまし
ひといふのは心のあるじでありまして、これを支那の文字にあらはして靈魂といふのであります。
さうして、この靈魂といふものが人々の身體の中にありて、それは見ることも出來ず、知ることも
出來ぬものであるとするのが、釋尊以前、古昔の印度の人々の考へでありました。このたましひと
肉體とは別々のもので、たましひが肉體に舍つて居るときには、その人が生きて居るのであります
が、若しその肉體が死亡するときはたましひはそれから離れて天上へ行くとせられたのでありま
す。すなはち、このたましひといふものが非物質的の自我を形成して、自身を自身と知りつつ、變
轉する世界にありて、不變不易のものであると、釋尊以前、古代の印度の人々は考へて居つたので
あります。古代希臘の人も、これと同じやうに考へて居つたのであります。それよりしてたましひ
が他の人に憑くとか、たましひが肉體から離れて空中に遊動するとか（離魂）、或は肉體が死滅した
る後にも残りて永久に存するとか（幽靈）といふやうな考が色々に行はれるやうになつたのであり

ます。今日我邦でも、なほそれと同一の考を持つて居つて、幽霊などを信する人が少なくないのであります。すこし學問のある人でもそれを信じて、たましひが寫眞にとれるなどと吹聴して、さうして多數の人々にそれを信じさせて居るものもあります。

自我の輪廻

釋尊以前、印度の古代の人々は、かやうに自我が不變不易のものであると考へたのでありますから、その自我が輪廻して、人間は未來にその報を受けるものであるといふことが重く考へられたのであります。世の中の一切のものは無常であり、それが常に變轉して居るといふことだけは信じて居つたのでありますが、その間にありて、たましひのみは何時までも變轉するものでなく、肉體が死亡すればそれを離れて又他の肉體に移り、時としては犬にも轉生し、時としては猫にも轉生し、又或は鳥などにも轉生して、現在の行爲の果報を未來に受けるものであると考へて居つたのであります。これが釋尊以前、印度に廣く行はれて居つたところの「我」の説でありました。

四法本

しかるに、釋尊は先づこの「我」の説を排斥せられたのであります。「増一阿含經」の中に

『世尊告げたまふ。梵志四人あり、ともに死を免れむとして、一人は空に上り、一人は海に沈み、一人は山に隠れ、一人は地に入りしも、皆ともに同じく死せり。この故に死を免かれむとせば四法本を思惟すべし。いかんが四となす。一切行の無常を初法本とし、一切行の苦を第二法本とし、一切法の無我を第三法本とし、滅盡を涅槃となすを第四法本となす。まさにともにこの四法本を思惟すべし、しかる所以は、すなはち苦の元本たる生老病死愁憂苦惱を脱すればなり。この故に諸の行者、方便を求めてこの四法を成すべし』

と説いてありますが、これに據りて見ますと、世の中の一切のものは無常であります、しかるにその無常を無常と知ること能はずしてそれを有常のものとし又それを有常たらしめむとするによつて一切の事は皆苦しみを感じるのであります。しかしながら、諸行が無常でありとすれば諸法が無我であるといふことは自明の理であります。世の中の一切の事物が常なくして變轉するものであれば、すべての事物に常一主宰の我がある譯はありません。すべてのものが變轉する中にありてひとり自我のみが不變であるといふことは考へられぬことであります。

三法印

そこで、釋尊は、無常と無我とを説かれたのでありますが、それに涅槃を加へて三法印と言はれて居るのであります。それは固より後の人が言ひ出したことで釋尊自身が申されたものではありません。釋尊の教が段々との世に傳はりまして、種々の解釋が世に行はれるやうになりましたから、古い御經の中にて所謂小乘の經典は釋尊に親炙した弟子達が聽聞したことを書き集めたものであるといふことでありまして、その内に釋尊の教説でないものが混入して居るのでありますから、佛法の印が押してあれば佛教、さうでなければ佛教でないといふ意味で、法印と名づけられたものが無常と無我と涅槃とであります。「法華玄義」に

『釋論に云ふ、諸の小乘經、若し無常・無我・涅槃の三印あれば、其説を印定し、即ちこれ佛説なり。若しこの三法印のこれに印するものなければ即ちこれ魔説なり。世の公文が印を得て信すべきが如し、故に三法印と名づく。一に無常印。謂ふ、世間生死及び一切の法、皆これ無常なり、衆生了せず、無常の法の中に於て、執りて常想をなす。この故に佛、無常を説て、この執常の倒を破す。これを無常印と名づく。二に無我印、謂ふ、世間生死及び一切の法皆これ因縁和合して有り、虚假不實、本と我あることなし、衆生了せず、一切の法に於て總て主宰を立て、これを執て我となす、この故に、佛、無我を説きてその著我の倒を破す。これを無我印と名づく。三に涅槃印、梵語涅槃、華に滅度と曰ふ。謂ふ一切の衆生、生死これ苦なるを知らず、而して更に惑を起し、業を造り、三界に流轉す、この故に佛、涅槃の法を説き、それをして生死の苦を出離して寂滅の樂を得せしむ、これ

を涅槃印と名づく』

この説明は、最も簡略に又最も明瞭に無我を説明したものでありませう。

五 蘊

かやうにして、釋尊は釋尊以前、印度の人々が信じて居つた自我の説を排斥して無我の説を立てられたのであります。さうして常に法の無我と人の無我とを説かれたことは前に申した通りであります。その中に就きて、銘々の心のありさまにつきて無我の理を説明せられたことに關して種々の記述があります。釋尊が頻婆娑羅王に説かれたことが「因果經」に次のやうに載せてあります。

『大王まさに知るべし、この五陰の身は識を以て本となし、識によるが故に意根を生じ、意根を以ての故に色を生ず、而してこの色法は生滅して住まらず、大王もしよくかくのごとく觀せば、すなはちよく身の無常を知り、身の無常を知らば身相を取らず、すなはちよく我と及び我所とを離れむ、もしよく色を觀するに、我と我所とを離れずば、すなはち色の生ずるは苦の生ずるにして、色の滅するは苦の滅するなるを知らむ。もし人よくかくのごとく觀するを名けて解となし、この觀をなす能はざれば名づけて縛となす。法はもと我なく、及び我所なし、

倒想を以ての故に横に、我及び我所ありと計するのみにて實の法あることなし、もしよくこの倒惑の想を斷せばすなはちこれ解脫なり』

かやうにして、釋尊は五陰の身の無常なることを説きて、「我」の無いことを詳かに述べて居られるのであります。「五陰」といふのは一つに五蘊とも名づけられて居るのであります。それは五つの法が積聚してこの身を成するが故にこれを五蘊と名づけるといふ意味であります。さうしてこの五つの蘊といふのは第一色蘊、第二受蘊、第三想蘊、第四行蘊、第五識蘊の五つであります。この第一の色蘊は物質で、すなはち肉體であります。さうして第二から第五までの四蘊は精神の作用であります。細かに申せば受蘊とは感覺、知覺及び觀念などの認識機能を廣く指すもので、想蘊とは思考、行蘊とは行爲、識蘊とは判斷の作用であると思ふべきもので、總して精神の作用に屬するものであります。五蘊とはこの肉體と精神とがひとつもので、それも五蘊が和合して居るときに状態である、と説くのであります。

身と心

前にお話致した鐵眼禪師の「假字法語」の中に、五蘊のことを通俗的に説明してありますが、そ

れには

『五蘊といふは色・受・行・想・識の五つなり、五の品ことなりといへども、唯身と心との事なり、はじめに色といふは身なり、後の四つは心なり』

と説明して、それから五蘊のことがくはしく説いてあります。さうして、その五蘊が皆空である、ことを觀することによりて一切の苦厄を離れることが出来る、と示されたのであります。佛教の説にては三界唯識と申して、我々には我々の識といふものがあり、それが三界六道の迷ひをつくり出すと考へるのであります。さうして、天地虚空、その中の有情・非情のさまざまのものを想ひ出すので、それは寢ぶりたるものが夢を見るやうなものであると説かれて居るのであります。五蘊もその夢であるから、本より空にして無きものであるといふことをさとりて、その理を明かに照して見れば一切の苦惱を度脱することが出来る、と示されるのであります。まことにそれは道理至極のことでありませう。しかしながら、これは理論の上でいふことでありまして、我々の現實の身と心とは、五蘊皆空であるとしても、なほ明かに五蘊として示されたやうに、我々の前に嚴然として存在して居るのであります。それ故に、現在の事實としてこれを見るときは、我々の身と心とは全く色・受・想・行・識の五蘊が和合して居るものとするの外はありませぬ。さうして若しこの五蘊が、別々に

離れるに至つたときは、そこに我々の身と心とは又、忽にして無くなつて仕舞ふのであります。かやうに五蘊が和合すれば生命があり、離散すれば生命を失ふといふ説は現時の心理學や生理學にて説くところと略ぼ同じやうな考でありまして、別にたましひといふやうなものが、五蘊を離れて別に存在してそれが何處までも永續するものであるとは説かぬことは全く同一であります。

別の我なし

釋尊は此の如くにして、その當時廣く印度に行はれて居つて自我の永續の考を排斥せられたのであります。そこでその説を聞いた頻婆娑羅王は疑を起しまして、若し「我」といふものが永續するものでないとするれば未來に果報を受くるものは誰であらうかと質しました。釋尊はこれを説明して、次のやうに言はれました。

『一切衆生の爲すところの善惡及び受るところの果報は皆、我の造にあらず、また我の受にあらず、しかも今現に善惡を造作して果報を受く。大王よ、情と塵と識と合して以て、境に於て染を生じ、累想滋繁し、この縁を以ての故に、生死に馳流し、つぶさに苦報を受るも、若し境に於て染なく、その累想を息めるときはすなはち解脱を得む。情・塵・識の三事の因縁を以て、ともに善惡を起し、及び果報を受くるのみ、更に別の我なきなり』

〔因果經〕

釋尊はかやうに、我々が善惡を造ることは我々の精神の作用に外ならぬことを説かれたのであります。説明の言葉が六ヶ敷しいので、一寸わかりかねるやうであります。平易にこれを解釋しますれば、我々が善いとか、惡いとかといふ事を爲すのは、我々の感覺とか、感情とかといふやうな精神の作用が外界（境と名づける）の刺戟に對して反應するがためで、外界に執著（染と名づける）して、それによりて苦しみの種をつくるものである、決して別に我といふものがあつて善惡を造るのではない。何處までも現實の我々の精神の作用が外界の刺戟に應じて種々の思考を生じ、それによりて種々の善惡を造るものであるから、従つてその果報を受るものも我といふ常一主宰のものではないと言はれたのであります。いかにもさう考へるべきであらうと思ひます。

情・塵・識

それから釋尊は、例を擧げてこの情・塵・識の關係を説明して居られるのであります。それは

『たとへば火を鑽るに、手に因りて燈を轉じ、火の生ずるが如し、かの火の性は手より生ぜず、及び燈より出でず、しかもまた手を離れず、及び燈を鑽るを離れず、かの情・塵・識もまたかくのごとし』〔因果經〕

と示されたやうに、情と塵と識との三事の和合によりて善惡果報が出来るものであるといふことで

ありまして、世の中の事物は、一切、因縁の和合によつてあらはれるものであるといふことの主張を譬喩にて説かれたのであります。すべてのものが因縁によりてあらはれるものである以上、別に「我」といふものがありて、獨立して善惡を造り、さうしてその果報を受けることは斷じて無い筈であります。

斷常を離る

かやうに情・塵・識の三事の因縁によりて善惡果報ありとするときは、この三事は常に相合ふべきものでなければならぬ、若し然らざれば斷絶するものであらうといふやうな考は、當然起るべき疑であります。そこで釋尊は更にそれにつきて説明して、次のやうに言はれました。

『この三事は常ならず、斷ならず、何を以ての故に。合するが故に斷ならず。離るるが故に常ならず。たとへば地水を縁とし、種子を因として芽葉を生ずるがごとし。種子已に謝すれば常と名づくるを得ず、芽葉を生ずるが故に斷と名づくるを得ず、斷常を離るるが故に中道と名づく。三事の因縁もまたかくのごとし』(因果經)

たとへて申せば、柿の實が熟してその枝から落ちる、それはまさにその枝を離れたのであります。しかしながら實はもとより枝から生じたものであります。その實から新に生じたる柿は前の柿とは

別のものでもありますけれども、しかしながら前の柿の種子から生じたものであります。それ故に斷にもあらず、常にもあらず、さういふ思考を離れて、現實に存するところの因縁を見ることが肝要であります。それが中道でありまして、すなはち正見であり、又正思惟であります。釋尊はかういふやうに説明して、その無我の説をば人々に對して教示せられたのであります。

作用の相續

かやうに、我といふ常一主宰のものが無いとすれば、我々が現在に造るところの善惡の果報は、誰人がこれを受るものであるかといふ疑問は、すぐに起るべき筈で、この疑問を起すものは獨り頻婆娑羅王ばかりではありませんまい。釋尊はこれをも因縁によりて説明して居られますが、それを單簡の言葉に直して申せば、我々の精神のはたらきは身體と共に無くなるものであるが、そのはたらきの結果は何時までも永續して消えることがない。それ故に我といふ思想が起るときにはその果報はすなはちその時にあらはれるものであるといふ意味に説いて、それに業の名がつけられたのであります。この事は「優婆塞戒經」によく、平易に説明してあります。それを御參考に申し上げて置きます。

『もし、五陰（五蘊）に業を作るも、成しおはればすなはち過ぎ、この身なほあれど、業に所依なし、衆もし依るところなくんばすなはち業なし。この身を捨ておはりて、如何ぞ報を得むといはば、この義然るべからず。何を以ての故に。一切の過業は體を待ち時を待てばなり。たとへば橋子の橋によりて生じ、初め酔く後に甜し、人の子を種うるに根莖葉花生するも、皆悉く酔ならず、時至りて果熟すれば酔味すなはち發す。この酔味は本なくして今有るにあらず、また縁なきにあらず、すなはちこれ過去の因縁なるがごとし。身・口・意の業もまたかくのごとし、もしこの業いつこに住すといはばこの業は過去世中に住し、時を待ち器を待ちて果報を得受するなり。』

まことによく我々の善惡の果報が何時までも永く續くことを説明したものと申すべきであります。かやうに考へて見れば、我々の心は、もとよりたましひといふやうな獨立のものがあつて、それをはたらかして居るのではなく、全く情・塵・識の因縁によりて、因と縁とが和合するとき始めてあらはれるもので、因縁が無くなればすなはち消えるものでありますが、しかしながらその心のはたらきとして造り上げたものは業として何時までも永續するものであります。それ故に、現在の心のはたらきに注意して善くこれを調ふることをつとめねばなりません。

意識内容

しかしながら、宗教にありて肝要とするところは實際あらはれて居る「心」の相でありまして、その「心」の起原や、その哲學的思索などは、これを問題とすべきものではありません。さうして、通常、我々が「心」と言つて居るのは、これを今日の心理學の言葉にて言へば、意識の現象で、「心」の相といふのはすなはちその意識の内容として我々が自から認知するところのものを指すのであります。佛教の書籍の中で、一番古い内容を有すると言はれるものは「阿含經」を始めとして、所謂小乗の經典と名づけられるものでありますが、その中の「遺教經」には「心を五根（眼・耳・鼻・舌・身）の主となす。心の畏るべきは毒蛇・惡獸・怨賊・大火より甚し。たとへば人の手に蜜器を執り、動轉輕躁としてただ蜜のみを見て深坑を見ざるが如し」とあります。「四十二章經」には「慎しみて汝が意を信することなかれ、意終に信すべからず」とあります。

かやうに、阿含時代の書物に見えたる「心」の説明は甚だ實際的のものでありまして、心を以て五根の主となし、よろしくこれを守護すべきことを説いてあるのであります。現實のままに「心」を見て、それを端しくすべきことが説かれて居るといふことが明かに認められるのであります。

心性清淨

阿含の經典に次ぎては所謂方等・般若等の經典であります。それには「心」につきて、次のやうな記載があります。『一切衆生の心性はもと淨し、性もと淨きものは煩惱の諸結も、これを洗著する能はず、なほ虚空の汚すべからざるごとし。心性と空性と等しく二つあるなし、衆生は心性の淨きを知らざるが故に、欲・煩惱の繫縛することとなる、如來ここに於て大悲を起し、正法を説き演べたまふはこれを知らしめんと欲するが故なり』(『大集經』)。『凡夫は自心を觀するが故に、生死海中に漂ひ、諸佛・菩薩はよく心を觀るが故に、生死海を渡りて彼岸に至る』(『心地觀經』)。『菩薩は餘事を覺るべからず、ただ自心を覺るべし。自心を覺るものはすなはち一切衆生の心を覺る。自心清淨なればすなはち一切衆生の心清淨なるを以て、自心の體性はこれ一切衆生の體性の如く、自心の離垢はこれ一切衆生の離垢のごとし』(『大壯嚴法門經』)。『心性もと淨きこと水中の月の如し』(『大寶積經』)。『心は境界に隨つて流る、鐵の磁石に於けるがごとし』(『入楞伽經』)。

これ等の説明によりて見るときは、我々の心性は固より清淨のものであるが、煩惱によりて汚かされて居るのであると考へられたのであります。これは現實のままに心の相をながめたる時代より進みて、更にそれを思索的に見ての説明であります。

三界唯心

「心地觀經」の中に「我が佛法の中には心を以て主となす、一切の諸法、心によらざるはなし」とあります。この種の唯心の説は諸書に載せられて居りますが、その二三のものを鈔録すれば次の通りであります。

『一切の諸法は皆、妄想より生じ、妄心を本とす。然るにこの妄心は自相なく、ただ境界によりてあり。この妄心と境界とはともに相よりて起るといへども先後なし、而してこの妄心、よく一切境界の原主となる、所以は如何、妄心によりて、法界の一相を了せざるが故に、心に無明ありと説く、この無明力の因によるが故に、妄境界を現じ、また無明の滅するに依るが故に、一切の境界滅するなり。一切の境界を了せざるが故に、境界に無明ありと説くにあらず。また境界によりて無明を生ずるにあらず、一切の諸佛は一切の境界に於て無明を生ぜざるを以てなり。また境界滅するが故に無明心の滅するにあらず、一切の境界は本よりこのかた體性自滅未だ曾て有らざるを以てなり。この故に一切の諸法は心を本となす、一切の諸法はことごとく心と名づくべし』(『大集會正法經』)。

これによりて明かに知られるやうに、世の中の一切の事物はすべて自心の分別の見るところであ

ると説かれるのであります。それ故に、人が若し地獄の行をするときにはすなはち地獄の想がある。人が若し畜生の行をなすときにはすなはち畜生の想がある。人が若し餓鬼の行をなせばすなはち餓鬼の想がある。一切の萬物は皆、有るところがなく、ただ所作の名によりて、その思想があると説かれるのであります。これは明かに哲學的の考に外ならぬものであります。

心佛衆生

かくの如く、「阿含經」の時代にありては、「心」は現實の「心」そのままに見られたのでありましたが、それから三界唯心の教理があらはれ、更に進みて、法華・涅槃・華嚴の諸經に至りましては、心と佛と衆生との三が差別なきものであるとせらるるに至つたのであります。これが所謂大乘佛教の所説であります。

「六十華嚴經」に『心は工なる畫師の如し、種々の五陰を畫く、一切世界の中に法として造らざるものはなし。心のごとく佛もまた爾かり。佛のごとく衆生もまた然り。心、佛及び衆生とこの三は差別なし。諸佛はことごとく一切のものの心より轉ずるを了知したまふ。もしよくかくのごとく解せばかの人眞佛を見る。心はまたこれ身にあらず、身もまたこれ心にあらず、一切の佛事を作し、自在、未曾有なり。もしも、三世一切の佛を知らむ』

と欲し求めなば、かくのごとく觀すべし、一心諸の如來を造る』

しかしながら、これは固より哲學上の考でありまして、宗教の上から見ればまことに縁の遠い理論の穿鑿であると申さねばなりません。

涅槃寂靜

前にお話した通り、諸行は無常であり、諸法は無我であるにも拘らず、無常の世界にありて有常を求め、無我の世界に有我を欲するために、我々人間の生活は常に苦であります。しかるに我々はその理をささらずして更に惑を起し、業を造り、三界に流轉するのであります。それ故に、釋尊は涅槃の法を説き、それによりて寂滅の樂を得せしめやうとせられるのであります。この涅槃寂靜こそ、宗教としての佛教の最終の目的とするところであると言はねばなりません。

「法經句」に釋尊の言葉が擧げてあります中に『餓を大病となし、行を最苦となす、已に諦かに此を知る、泥洹最も安し』とありますが、その意味は飢餓は最大の病である。つくられたるものは最大の苦しみである。このことをあきらかに認識することが出来るものこそ泥洹（涅槃）の状態に達して最大の幸福を得るのであるといふのであります。又『無病は最利。知是は最富。厚きを最友と』

す。泥洹は最樂なり」とありますが、その意味は、無病健全なることはこの上もなき利益である。足ることを知るのは最も財産に富みたるものである。信することの厚きは最も親しき友であり、泥洹は第一の樂であるといふことであります。又、「雜阿含經」には『貪欲、瞋恚、愚癡永く盡き、一切の煩惱永く盡くるを涅槃と名づく』と説いてあります。これ等の説明によりて見ますと、涅槃といふことは精神的自由の境地を持すもので、一切の苦惱を離れて寂滅の世界に入ることはいふのであることが窺はれるのであります。言葉を代へて言へば、涅槃は無我であり、自在であり、求められないから一切の法を得ることが出来る、又涅槃は大樂である、大樂といふのは苦もなく、樂もなく、遠く一切の煩惱を離れ、業も身も心も皆清淨であるところの境地を指していふのであることが知られるのであります。

法性の眞理

かくの如き、涅槃の境地は、いふまでもなく、有爲の諸法は皆盡きて、無爲常住の法性の眞理のみになつたものであります。すなはち我々が我々の迷妄の世界から消えて再びこの迷妄の世界に生れないことを言ふのであります。我々の身と心とが、全然滅亡してただ法性のみとなつたことをい

ふのであります。寂滅爲樂といふ言葉はまさに此の如き境地を指すものでありませう。しかしながら、我々がこの世界から消えて再び生れて來ぬといふことになる、それは大變にたよりのないもののやうに考へられるのであります。身もなくなり、心もなくなり、法性の眞理のみとなるといふことはこの身と心とに執著して居る我々に取りてはまことに心細いことでもありますから、さういふ涅槃寂靜は常人に取りては決して希望せらるべきものではないであります。寂滅爲樂といふときはいかにも哲學じみた空漠の考のやうでありますが、しかしながら、さういふ心境に到るといふことは、大菩提心を起して佛にならむと望むことに外ならぬものでありますから、宗教的に言ふ場合には、淨土に至ると申してよろしいことでもあります。

無爲の都

かやうにして、涅槃寂靜をば、その内容から見れば、一切の煩惱が無くなりたる状態でありまして、完全にその状態に達することは身體の死したる後であるべき筈であります。それ故に、涅槃寂靜はこれを宗教的感情の上から考へて、ある特別の場所であるかの如くに言はれるのは無理のないことであります。支那の善導大師は善導流の念佛の開祖でありますが、その書物の中には西方寂靜無爲

の都とありまして、涅槃寂靜の境地をば恰かも地理學的の邦土のやうに説いてあります。その外、安養の淨土とか、極樂とか、眞實の報土とか、いろいろ綺麗な名稱がつけられて居るのであります。これにつきましては親鸞聖人が法性の都と言はれたことにつきて、少しくその意味のあるところをお話致しませう。

法性の都

親鸞聖人が晩年に著はされました「唯信鈔文意」の中に、次のやうな説明があります。

『來迎トイフハ來ハ淨土へ來タラシムトイフ。コレスナハチ若不生者ノチヒテアラハスミノリナリ、云云、スナハチ他力ヲアラハスミコトナリ。マタ來ハカヘルトイフ、願海ニイリルニヨリテカナラズ大涅槃ニイタルヲ法性ノミヤコヘカヘルトマウスナリ、法性ノミヤコトイフハ法身トマウス如來ノサトリヲ自然ニヒラクナリ、サトリヲヒラクトキヲ法性ノミヤコヘカヘルトマウスナリ』

來迎といふことは、元來ならば、來り迎へるのでありますから、佛が來たりて衆生を迎へたまふのであります。親鸞聖人の説明によりますと、來迎といふのは我々衆生が淨土へかへることで、佛の方が待つて居られるといふ意味でありまして、これを法性の都へかへると申されるのであります。

さうして、その内容から申せば、如來の本願に攝取せられて必ず涅槃のさとりを開くことを法性の都へかへるといはれるのであります。わざ／＼法身とまうす如來のさとりを自然にひらく、そのさとりをひらくときを法性の都へかへるとまで説明してありますから、釋尊が涅槃寂靜といふ言葉にて言ひ現はされたる意味と同じやうな心の状態を指して居られることは疑のないことでありませう。親鸞聖人は又、その「三經往生文類」の中に、我々は如來の本願の力によりて必ず涅槃(滅度)のさとりをひらくことが出来るといふことを説明して必ず眞實報土に至ると言はれるのであります。これを我々の心の相の上に見るときは、涅槃寂靜の状態に達したことを指していふに外ならぬのであります。無論、法性の都へかへることも、眞實の報土に至ることも、死後のことであります。がそれが、現在の心の上にはあらはれてここに宗教のはたらきをあらはすものであります。たとへて申せば、明日・明後日はまだ來ぬ未來のことでありまして、明日・明後日のことにつきて考へるのとは今日でありまして、それが常に我々の日々の生活の上の問題であります。

八正道

已に前にも申したやうに、釋尊は成道の後、先づ十二因縁を説き、それから四諦の眞理を説かれ

ましたが、それは苦諦・集諦・滅諦・道諦の四諦であります。さうしてその第一の苦諦といふのは人生は苦しみであるといふ眞理であります。我々人間には愛欲といふものがあるから、すべてに執着する心を離ることが出来ないために、人生は苦である。知らねばなりません。さうしてその苦しみは我々の渴愛の心によりてこれを集めるのでありまして、苦しみといふものが獨立して存在するものではありません。苦しみといふものが我々の心の外にありて、それが我々の心の内へ飛び込むのではなく、外のものは如何やうにありても、我々の心がこれを苦しみにするのでありますから、これを集諦と名づけるのであります。この苦しみと、その苦しみの原因であるところの愛欲とを滅ぼすことによりて我々は始めて涅槃寂靜の境地に達することが出来るのであります。それが滅諦であります。さうして、この苦しみの原因たる愛欲を滅ばし、苦しみを集むることがなくなるやうにするには、八正道を修めることを要する、すなはち道諦といはれるものであります。

かやうにして、釋尊の所説によりまして、涅槃寂靜は我々に取りて全く理想の境地であります。さうして、この理想の境地に至るには八正道を修めねばならぬのであります。

如實修道

かやうに考へれば、涅槃寂靜の境地に到るといふことは、現實の我々の心から言へば、全く理想の境地を願求することでありまして、しかもそれは釋尊が説かれるところによると、如實に八正道を修めることのみよりてその目的は到達せらるべきものであります。八正道といふのは正見、正思惟、正語、正命、正業、正精進、正念、正定の八つの道でありまして、約めて言へば戒と定と慧の三學であります。さうしてこの八正道を修めるといふことは結局、愛欲を斷つといふことをその目的とするものであります。それ故に、前にもくわしく申したやうに、『諸行は無常であり、諸法は無我であるにも拘らず、無常の世界にありて有常を求め、無我の世界に有我を欲するために、我々人間の生活は常に苦であるのに、その理をさとらずして更に惑を起し、業を起し、三界に流轉する』のでありますから、釋尊は涅槃の法を説き、それによりて寂滅の樂を得せしめやうとせられるのであります。さうして釋尊の教へられるところによれば、我々が涅槃寂靜の法を得るといふことは如實に道を修めるの外にはないのであります。如實に道を修めるとき、その心の赴くところがすなはち涅槃の境であります。

愛欲の斷滅

そこで、極めて平易に、又約めてこれを申せば、涅槃といふことは愛欲が無くなつた状態であり、涅槃といふところをば、ある特別の國土であると推定し、その國土が何れかに存在するとして、その國土に到るときには我々には愛欲の心が全くその跡を絶つものであるとしたところで、結局、何時でも問題になるのは我々の心の状態であります。それ故に、涅槃寂靜の境地に到るといふことも、我々の心の中に愛欲が無くなる状態を指すものに外ならぬと考へることが最も至當でありませう。さうすれば、ここに實際上問題となるのは愛欲を斷滅するといふ事項であります。かやうにして、佛敎にありて、涅槃の悟を開くためには愛欲の斷滅を第一とするといふことが強調せられ、多くの修行者はこの方面に向つて努力したのであります。

愛欲の淨化

しかしながら、愛欲は人間に免るることの出来ない本性でありますから、いかにそれも斷滅しやうとしてもそれは斷滅せらるべきものではありません。小乗の敎を奉ずる人々は愛欲を斷滅するにあらざれば涅槃の境に至ることが出来ぬとして、如實に苦行を修めてその目的を達せむと努力したのであります。しかるに、大乘の佛敎になりまして、さういふことは我々人間の本性を無視したもの

であるとして、かくの如き苦行によりて愛欲を斷滅するの道に進まず、愛欲その儘の相をながめて、煩惱即菩提、生死即涅槃の考が起つたのであります。煩惱が即ち菩提であり、生死が即ち涅槃であるといふことは、哲學的の考が進みて、三界は唯一心であり、心と佛と衆生とが全く一とつのものであるといふ見地から、煩惱と菩提とが、その本質に於て各別のものでないことを根據として、煩惱を除きて菩提を得るのでなく、煩惱を轉じてそのまま菩提とすることを説いたのであります。平易にこれを言へば、我々は愛欲の奴でありながら、その愛欲を淨化することによりて涅槃の境地に到ることが出来ると説かれるのであります。

愛欲の否定

しからば、如何にして、愛欲を淨化すべきかと申すに、それは我々のやうな愚昧のものとしては、これを否定するより外には道がないのであります。しかしながら、ここに否定するといふのはその愛欲の價値をなくすることをいふのでありまして、愛欲を打ち消すことを指していふのではありませぬ。元來、我々は愛欲そのものに常に多大の價値を置いて居るのであります。たとへば或物が欲しい、或は或人が憎いといふやうに、愛欲の上に多大の價値を置いて居るのでありますから、そこ

で或物が欲しいといふときにはいかにしてかそれを得ようと努力し、他の人を突きつけてもなほこれを我物にしようとする。また憎いと思ふときには、憎い人に對していろいろの手段を施すのであります。しかもこの愛欲は人間の自性として、到底これを斷滅することは出来ませぬが、その價値を否定することは、そこに氣がつけば我々にも出来るものであります。煩惱を斷じて涅槃を得るといふことは到底不可能のことではありますが、煩惱を斷せずして涅槃を得るといふことは、煩惱の否定によりて我々にも出来ることであります。たとへば昔の高僧の中に、自分の名聞利養の心を拜がむだ方がありますが、それは名聞利養の心は煩惱の主要なるもので、佛教では、最も惡むべきものとして排斥せられて居るものであります。しかしながら、その高僧は幼若の頃に、年が長じて後に名僧となりてその聲譽を天下に擅にしようと思つた、この名聞利養の心が本となりて、修業した結果、その地位に到達したのは全く名聞利養さまのお影であると、その煩惱の心をおがまれたのであります。ここに普通の名聞利養の心の價値は否定せられて、それが淨化せられてあらはれて居るのであります。又昔の妙好人の中には自己の煩惱に氣をつけてかかる煩惱具足のものゝ如來さまがおたすけ下さると感謝して、煩惱の起るごとに一々それを否定して喜びの心をあらはしたものが多かつたのであります。

無上菩提を獲得したのが佛であるとして、さて佛にならうといふ愛欲が起るとすれば、それは愛欲の不淨のものでありませう。明慧上人が『佛に成りて何かせむ』と言はれたのもこの邊の消息を示すものでありませう。自分のやうに愚惡のものを向上せしめて佛のやうに圓滿の人格にしようとする念願は、たしかに我々の愛欲のあらはれでありませう。しかるに、我々は『何れの行も及び難いものであるから地獄は必定である』と、到底佛になることの出来ぬものであると、内省するときに、佛にならうとする愛欲は淨化せられて、佛になることの出来ない自身の相を見るときに、そこに我々は涅槃寂靜の境地に到るべき道程に進むで居るものと言はねばなりません。極樂に行きたいと念願して、しかしながら自身を反省すれば到底極樂に行くことの出来ぬものであると、その愛欲を否定したときに、そこにはたらくものは淨化せられたる愛欲として、極樂を念願することでありませう。『極樂はたのしむと聞いて參らむと願ひのぞむものは佛にならず』して、『極樂には行くことの出来ぬ自身ぞ』と、不淨なる念願を否定したものと、眞に極樂に行くことが出来るでありませう。釋尊が我々の心の相を説き、その醜惡にして厭離すべきことを示されたのは、それを否定することによりて眞實の世界に入るべき道を説かれたのでありませう。

かういふ次第でありますから、釋尊の所説は、我々をして自己の内面を深く省察せしめることによりて、それが倫理的よりして宗教のはたらきとなるものであります。さうして、宗教の感情の上から見るときは涅槃の境地はごうしても我々の現實の世界を離れたるものでありまして、これを彼岸の世界であるとするのは、まことに當然のことでありませう。彼岸の世界が果して何處であるかといふことは固より我々の知るところではありませぬ。しかしながら、我々が生死の苦界を離れるためにはごうしてもそこへ行かねばならぬところでもあります。若し釋尊の教に従ふて如實に八正道を修めることが出来るならば、その人必ず涅槃寂靜の境地へ赴くことでありませう。それは常・樂・我・淨の四徳が備はりたるところで、それよりしてこの人間の世界へは再び生れて來ることはないのであります。それは固より現在の世界と同一のものでありませぬが、しかも決して相離れたものではありませぬ。卑近の譬喩を以て言へば明日が今日と同一のものでなくしてしかも今日の連続であると同様であります。今日は現在の世界であり、明日は彼岸の世界であります。明日はいかやうなものであるかといふことは到底我々にはわからぬことではありますが、今日の現在につづき

てあらはれるものであります。我々は明日のことにつきて何事をも知ることが出来ませぬ。しかしながら現在の今日にありて、明日の必ず來るべきことを信じて疑はぬのであります。それ故に、彼岸の世界を涅槃寂靜の境地とすれば、それを極樂淨土と名づくることは至當でありませう。前にくわしく申した通り涅槃寂靜の境地は、我々の煩惱が斷絶せられ妄想の意識が全くなくなりたるところでありますから、それは必ず眞如法性の世界であります。決して彼の燈火が消えて跡方がなくなつたやうな虚無の世界ではありませぬ。

釋尊の教

釋尊の教は大體、以上に説明した通りであります。これを約めて、その要點を挙げますと、第一に釋尊は人生の事實をそのままに觀察し、それを分拆して、眞相を明かにせられたのであります。しかしながら、それは極めて實際的のものでありまして、哲學的の思索を加へられたものではありません。それ故に、我々の心のあさましき相を見ても、後の人々が思索したやうな煩瑣の説明をくわしくしては居られませぬ。我々の心は無明と貪愛とのために迷ふものであるからそれを斷ちて、正しき智慧を得るやうにつとめなければならぬと説かれたのであります。さうして、それを説

明するために、相手の機根に相應して、よく理解することが出来るやうに懇切に説明せられたのであります。固より人生が苦しみであることは誰人でも考へることでありましたが、その苦しみが無常のためにあらはれる、無常は因縁所生の法であるから苦しみである、と説いたのは釋尊であります。さうして、苦しみの責任は全然自己にあるから、苦しみから逃避することなく、正見と正思惟とによりて如實に苦しみの相を見るやうにとすすめられたのであります。世の中は無常であるのに、それを無常と知ることが出来ずして、苦しみを感ずることは全く自分の責任である。苦しみは全くこの「我」が勝手に造り上げるものである。従つて苦しみを解決するものは自分でなくてはならぬ。徒らに他の神に祈願してもそれは到底駄目であると教へられたのであります。

かういふ次第でありますから釋尊の教には教權といふものはなかつたのであります。『自己の心を師となせよ、他に隨て師とせざれ、自己を師となすものは眞の智人の法を獲る』と言つて居られるのであります。

釋尊の教は此の如く、實踐的のものでありまして、その言ふが如くに行ふことを淨行として勧められ、無用の議論はこれを戲論として排斥せられたのであります。『我れ涅槃に要なきことは言はず』『我は我が知れるすべてを言はず、涅槃の現實のためにのみ説く』と釋尊は言つて居られるので

あります。かやうに、釋尊は體驗のない哲學を排斥し、論議することを避けられたのであります。

それから、釋尊の教を味ふことにつきて最も重要なことは釋尊が「法」を尊崇せられた事實を看過してはならぬことでもあります。釋尊は『自からさとれる法を尊び、敬ふて日を送るであらう』と弟子達に對して語られたのであります。「法」といふは不可思議のもので、無上の法、すなはち涅槃であります。さうして、この「法」の動くものが「佛」であり、「佛」として「法」があらはれるのは明かに自己の心の内面を観るもののみこれを感じることが出来るのであります。それ故に、釋尊が説かれたるすべての教が、一寸見れば道德の言葉のやうに思はれましたも、それは聴くものの内省が十分であれば、何時でも不思議の法に接することが出来て、ここに宗教の心があらはれるのであります。

552
316

昭和八年十一月廿五日印刷
昭和八年十一月廿七日發行

(定價金壹圓
郵税金四錢)

8. 11. 29

發行所

東京市麴町區內山下町一丁目一番地 東洋ビルヂング四階	東京市小石川區高田豐川町三十番地 印刷所	東京市小石川區高田豐川町三十番地 印刷者	東京市小石川區高田豐川町三十番地 右代表者	編輯者 兼發行所	東京市麴町區內山下町一丁目一番地 東洋ビルヂング四階
中山文化研究所	德泰社	宗泰	秋山不二	中山文化研究所	中山文化研究所

552
316

552
316

